2025 年度

東洋大学

SDGs 実践講座　活動報告

2025年度「SDGs実践講座~17ゴールへの第一歩~」活動報告

Ⅰ.　はじめに
Ⅱ.　運営委員
Ⅲ.　運営委員会の開催
Ⅳ.　広告宣伝
Ⅴ.　募集
Ⅵ.　履修者（学部・学年別）
Ⅶ.　履修者数・単位修得者数
Ⅷ.　予算執行報告
Ⅸ.　骨子およびプログラム
Ⅹ.　講義プログラム
ⅩⅠ.　講義要旨
ⅩⅡ.　受講前・受講後アンケート結果
ⅩⅢ.　最終レポート（ホームページに掲載）

「SDGs実践講座」は、2022年度より5年目の開講として、全15回の講義を教員および外部講師に担当いただき、対面・オンライン講義として実施をした。今年度の授業は従前までの事前申込制から、一般の履修登録に変更し、より多くの履修者が受講できるように手配をした。

以下、今年度の活動報告を行う。

Ⅰ.はじめに

全学総合講義「SDGs実践講座 －17ゴールへの第一歩－」をふり返って

代表担当者：東洋大学副学長/生命科学部 金子　律子

SDGs（Sustainable Development Goals）は、2015年9月の国連サミットで採択された「持続可能な開発のための2030アジェンダ」に記載された、2030年までに持続可能でよりよい世界を目指す国際目標です。このSDGsは発展途上国のみならず、先進国自身が取り組むユニバーサルなものであり、皆が日々行っている諸活動の中でSDGsに取り組むことが求められています。さらに、2020年に「行動の10年」がスタートしたという宣言がありました。2015年に公表された目標に対し5年間の予備期間を経て、2020年から10年間をかけて目標を実現しようという、次のフェーズに移ったことが宣言されたということです。

これらの状況を鑑み、本学でも今年度から全学部を対象とした講義「SDGs実践講座 －17ゴールへの第一歩－」を立ち上げました。本講義の目的は下記の3つです。

①SDGsに関し、その理念と各ゴールに対する具体的な取り組みを体系的に学ぶ。
②この学びを「自分ごと」として理解し、「自らの行動や選択を学生生活の中で具体的に変化させて行く」。
③在学中あるいは卒業後に国内外の社会で活躍できる人材に成長する。

これらの目標に対し、受講生の講義の最終発表や最終レポートから、「行動の10年」に相応しい、SDGsをベースとした「行動変容を伴う学び」がある程度実現できたと考えています。

学祖井上円了先生の言葉である、本学の建学の精神は「諸学の基礎は哲学にあり」ですが、これに「他者のために自己を磨く」「活動の中で奮闘する」という言葉を纏めると、「深く考え、実行する」ということになります。この井上円了哲学の実践版として本講義を実施したわけですが、全受講生が将来、「深く考え、実行する」人材として、国内外で大いに活躍してくれるものと確信しています。

Ⅱ.運営委員

教学担当常務理事	金子 光一
学長	矢口 悦子
教務部長（副学長）	多田　英明（法学部教授）
社会貢献センター長	髙山 直樹（福祉社会デザイン学部教授）
講座運営担当責任者	金子 律子（生命科学部教授）
講座運営担当者	小瀬 博之（総合情報学部教授）
講座運営担当者	川口 英夫（生命科学部教授）
講座運営担当者	堀本 麻由子（文学部准教授）

Ⅲ.運営委員会の開催

実施なし

Ⅳ.広告宣伝

学内掲示、ホームページ（ボランティア支援室）、本学公式アプリ、ToyoNet-G、ToyoNet-Ace による配信等で広報活動を行なった。

Ⅴ.募集

申込期間： 2025 年 7 月 7 日(月)～8 月 22 日(金)　＊申込状況により 9/15(月)まで延長
申込総数： 31 名
受講者決定通知および意思確認：9/17(水)
授業開始： 9/19（金） A301 教室（10 号館 3 階）
追加登録期間：2025 年 9 月 26 日(金)～9 月 28 日(日)
履修者数（最終）： 26 名

Ⅵ. 履修者（学部・学年別）

学部/学年	1年	2年	3年	4年	合計
文学部1部		1		1	2
経済学部1部				1	1
経営学部第2部	1				1
法学部第1部		2			2
法学部第2部	2	3	1		6
社会学部第1部		3			3
国際学部		1		1	2
国際観光学部	2				2
福祉社会デザイン学部		2			2
総合情報学部		1	2		3
生命科学部		1			1
食環境科学部	1				1
合計	6	14	3	3	26

Ⅶ. 履修者数・単位修得者数

1、履修者数

「全学総合Ｊ／SDGs 実践講座（-17 ゴールへの第一歩-）」　19 名　（白山キャンパス）
「全学総合Ｊ／SDGs 実践講座（-17 ゴールへの第一歩-）」　2 名　（赤羽台キャンパス）
「SDGs 実践講座（-17 ゴールへの第一歩-）／全学総合Ｊ）」　2 名　（朝霞キャンパス）
「全学総合Ｆ（SDGs 講座 17 ゴールへの第一歩）」　3 名　（川越キャンパス）

2、単位修得者数

25 名（96%）

Ⅷ. 予算執行報告

支出

予算目的	予算件名	予算額	執行額	残額
授業・講座等運営	SDGs 実践講座	230,000 円	102,800 円	127,200 円

IX. 骨子およびプログラム

2025 年度　SDGs 実践講座「17 ゴールへの第一歩」の骨子（シラバス）

１．講座の目的・内容

「SDGs（Sustainable Developmental Goals)」とは、2015 年 9 月に国連サミットで採択された「持続可能な開発のための 2030 アジェンダ」に記載された、2030 年までに持続可能でより良い世界を目指す、17 項からなる国際目標である。本講義の目的は、この SDGs について、その理念と各ゴールに対する具体的な取り組みを体系的に学ぶことである。さらに、この学びを「自分ごと」として理解し、「自らの行動や選択を学生生活の中で具体的に変化させて行く」ことで、在学中、あるいは卒業後に国内外の社会で活躍できる人材に成長することを目指す。

なお、本講義受講期間中に SDG s に繋がる活動をスタートしていただく。社会貢献センター(ボランティア支援室)等で実施する活動、若しくは自身での活動を通じて、本講義の学びを「自分ごと」にする。これらの活動を踏まえ、グループでの最終発表および各自の最終レポートをまとめる。

また、本講座終了後、受講者には東洋大学 SDG s アンバサダーへの登録を推奨します。

２．本講座の名称

本講座は「SDGs 実践講座～17 ゴールへの第一歩～」を正式名称とする。

３．本講座の募集人員、応募方法等

1)　募集人員：50 名程度
2)　対　　象：本学の学部生
3)　授業期間：秋学期（9 月 19 日～1 月 23 日まで）
4)　応募方法：グーグルフォームより申込をする。記載の志望理由等により受講を認める。

４．学修到達目標

受講生は、以下の力を涵養し獲得することが期待される

１．SDGs の理念と具体的な取り組みを「自分ごと」として理解する力
２．「自分ごと」として理解したことを、主体的な行動として行動変容につなげる力
３．課題・問題を発見する力
４．他者と関わりチームとして成果をあげる力

５．講義スケジュール

Ⅰ．1）学長挨拶（矢口 悦子 学長）SDGs 実践講座運営担当挨拶（金子先生）

2)「外国にルーツを持つ若者のキャリアをめぐる課題と当事者の経験」(ラウフ アルーサ アアリーさん)

3）アイスブレイク（堀本 麻由子先生 文学部教授）

Ⅱ．シティズンシップを育くむとは―SDGs 実践との関係から―（堀本 麻由子先生 文学部教授）

Ⅲ．能登半島記―被災記者が記録した 300 日の肉声と景色―（前口　憲幸 北陸中日新聞七尾支局長）

Ⅳ．世界と日本の子どもの貧困について考えよう（小野　道子 福祉社会デザイン学部准教授）

Ⅴ．カーボンニュートラルの実現に向けて私たちは何ができるか？（小瀬 博之 総合情報学部教授）

Ⅵ．移民・難民と私たち：共生社会へのカギ（南野　奈津子 福祉社会デザイン学部教授）

Ⅶ．対話的な深い学びへのアプローチ（堀本 麻由子 文学部准教授）

Ⅷ．ジェンダー・セクシュアリティから社会を考える（外部講師 卒業生 勝又 栄政）

Ⅸ．開発途上国の生活環境改善に向けて（北脇 秀敏 国際学部教授）

Ⅹ．VUCA の時代に豊かなキャリアをどう作るのか？（榊原 圭子 社会学部教授）

Ⅺ．見える飢餓と見えない飢餓―植物科学からの挑戦―（廣津　直樹 生命科学部教授）

Ⅻ．まちや住まいの持続可能性を妨げない建築設計（伊藤　暁 理工学部教授）

XIII．水道水を考える（大塚 佳臣 総合情報学部教授）

XIV.平和と公正をすべての人に―中東から考える―(子島 進　国際学部教授/佐藤 麻利絵　筑波大学助教)

XV．最終グループ発表

上記プログラムを受講したまとめとして、グループ毎に受講生が、口頭および文書により発表する。

予め書面を作成し、当該書面に基づいて口頭報告をさせることで、プレゼンテーション能力の涵養を図る。

口頭報告については、教員が講評を行い、さらに思考を深化させるように指導する。

６．　成果の公表について

授業の成果については、運営、プログラム内容、最終報告書などをまとめた活動報告書として公表する。

７．　授業科目としての提供

授業科目「総合」(半期 15 回　2 単位）として提供し、単位認定を行う。

８．　録画収録および ToyoNet-Ace の活用

講義ついては、録画収録して講義記録として保存する。また、ToyoNet-Ace を活用して、授業運営に関する管理を行う。

９．　講師謝礼

学内者：授業コマに含む　　学外者：33,000 円（税込）

X．講義プログラム

2025年度　東洋大学SDGs実践講座

秋学期 講義+ディスカッション	秋期(金5)	17のゴール (※4は共通)	授業 形式	内容詳細(例)	講師	所属・肩書き
第1回	9月19日	全体	ハイフレックス	(16:30～16:50)学長挨拶、SDGs実践講座担当教員挨拶	矢口 悦子/金子 律子	学長/社会貢献センター運営委員(SDGs担当・生命科学部)
				(16:50～18:00)「外国にルーツを持つ若者のキャリアをめぐる課題と当事者の経験」及びアイスブレイク/ディスカッション	堀本 麻由子/ラウフ アルーサ アアリー	文学部/文学部教務課職員
第2回	9月26日	全体	ハイフレックス	シティズンシップを育くむとは―SDGs実践との関係から―	堀本 麻由子	文学部
第3回	10月3日	11、17	ハイフレックス	能登半島記ー被災記者が記録した300日の肉声と景色ー	前口 憲幸(外部講師)	外部講師(北陸中日新聞七尾支局長)
第4回	10月10日	1・5・11	ハイフレックス	世界と日本の子どもの貧困について考えよう	小野 道子	福祉社会デザイン学部
第5回	10月17日	7・12・13・15	ハイフレックス	カーボンニュートラルの実現に向けて私たちは何ができるか?	小瀬 博之	総合情報学部
第6回	10月24日	3・10・16	ハイフレックス	移民・難民と私たち:共生社会へのカギ	南野 奈津子	福祉社会デザイン学部
第7回	11月7日	4	ハイフレックス	対話的な深い学びへのアプローチ	堀本 麻由子	文学部
第8回	11月14日	5	ハイフレックス	ジェンダー・セクシュアリティから社会を考える	勝又栄政(外部講師 卒業生)	外部講師
第9回	11月21日	3・6・11	ハイフレックス	開発途上国の生活環境改善に向けて	北脇 秀敏	国際学研究科
第10回	11月28日	8	ハイフレックス	VUCAの時代に豊かなキャリアをどう作るのか?	榊原 圭子	社会学部
第11回	12月5日	2	ハイフレックス	見える飢餓と見えない飢餓ー植物科学からの挑戦ー	廣津 直樹	生命科学部
第12回	12月12日	11	ハイフレックス	まちや住まいの持続可能性を妨げない建築設計	伊藤 暁	理工学部
第13回	12月19日	3・6・12・14	ハイフレックス	水道水を考える	大塚 佳臣	総合情報学部
第14回	1月9日	16	ハイフレックス	平和と公正をすべての人にー中東から考えるー	子島 進/佐藤 麻利絵	国際学部/国際学部 非常勤講師・筑波大学助教
第15回	1月23日	全体	ハイフレックス	最終グループ発表	運営担当	

*プログラム内容・授業形式については変更する場合があります。

SDGs17 目標よりテーマを設定し、講義を行った。毎回の講義では、グループを設定し、グループワークやディスカッションを重視し、意見を出し合いながらグループ毎の意見をまとめ、発表した。

XI. 講義要旨

SDGs 実践講座第 1 回　講義要旨

9 月 19 日（金）

講師名： 堀本　麻由子（文学部教授）／ラウフ アルーサアアリー（文学部教務課職員）
テーマ： 外国にルーツを持つ若者のキャリアをめぐる課題と当事者の経験

冒頭に学長より、本学における SDG s との関連性や学びの意義についてお話があり、ウォーターサーバーの導入をはじめとした、様々なプロジェクトが学生発信で行われていることの紹介がなされた。講義においてはパキスタンにルーツを持つラウフさんより、外国にルーツを持つ講師自身の目線で感じた、社会の不公平や不平等というものに対してどのように向き合ってきたのかという経験談が語られた。とりわけ学生の関心も高い就職活動においては、講師が自身の強みは何であるか見出し、前向きに行動しつづける姿勢で取り組むことで、内定獲得という結果につながったエピソードが紹介され、受講者への力強いメッセージとして受け取られた。

SDGs 実践講座第 2 回 講義要旨

9 月 26 日（金）

講師名： 堀本　麻由子（文学部教授）
テーマ： シティズンシップを育むとは―SDGs 実践との関係から―

本講義は、シティズンシップ育成と本講座内容の関連について考えることを目的とした。そのため、冒頭において、本授業で大切にする二点を示した。一つは、民主政治の担い手である市民として、意見の相違を乗り越え、相互の人権を尊重しあえる社会を形成していくにはどうすればよいのかについて、共に考え、聴きあい、話し合うことで学ぶこと、二つは、市民として、異なる意見を尊重しつつ、身近な生活のなかの諸問題を解決するための効果的な議論と参加の方法を身に付けること、である。これら二点を理解するために、「市民とは何か」、「公共空間と私的空間」について、近くの人とじっくり話し合う時間をとった。加えて、話し合いの仕方について、自身の話の聴き方を振り返ることで、他者の話を理解することの難しさについて検討してもらった。多くの受講者にとって、本講座への参加の仕方や SDG s 課題との自分の関わりについて、改めて考える機会となった。

SDGs 実践講座第 3 回 講義要旨

10 月 3 日（金）

講師名： 外部講師（前口　憲幸／北陸中日新聞七尾支局長）
テーマ： 能登半島記―被災記者が記録した 300 日の肉声と景色―

本講義では能登半島地震当日のリアルな被災の様子について、講師より映像資料や取材写真をもとに、震災当時の詳細が語られた。特に受講者からの印象的なエピソードとして受け止められたのが、トイレ環境の整備が行き届かないことにより、子どもやお年寄りが水を飲まないという事象が発生し、体調不良者が相次ぐ悪循環に陥ったことであった。このことは報道だけでは伝わらないリアルな情報であり、災害時のトイレ問題の重要性を強く訴求するものであった。さらに復興はまだ道半ばであり、持続可能な街づくりを進めている状況について説明がなされた。学生のディスカッションにおいては、災害への備えへの必要性を認識したという意見や、自分事として考える機会となったという意見が多く見受けられた。

SDGs 実践講座第 4 回 講義要旨
10 月 10 日（金）

講師名： 小野 道子（福祉社会デザイン学部准教授）
テーマ： 世界と日本の子どもの貧困について考えよう

この講義では、SDGs 目標 1 の「貧困をなくそう」の内容やターゲット、絶対的貧困と相対的貧困の違いについて説明できるようになること、世界と日本の子どもの貧困の現状や対策について自分なりの考えを持つことができるようになることを目的とした。まずは「子どもの貧困」のイメージについて各自で考えてもらった。講義を聴くだけでなく、世界で極度の貧困状況にある子どもはどのようなリスクがあるのか、日本のひとり親家庭の子どもの貧困率がなぜ高いのか、日本の子どもの貧困対策など、グループで話し合い発表した。子どもだけでなくおとなの貧困も自己責任ではないこと、災害などが起きれば誰でも脆弱層になり得るため、平時からのレジリエンス構築が大切であること、2030 年までにどのようにしたら子どもの貧困を減らせるのか考え続けてもらうことの重要性などを伝えた。最後に、学内の SDGs 研究の取り組みとして、国際共生社会研究センターによるソーラーランタン配布プロジェクト（Buy One Give One）、福祉社会開発研究センターによる「災害時のこどもの居場所づくり」調査研究事業についても紹介した。

SDGs 実践講座第 5 回 講義要旨
１０ 月 17 日（金）

講師名：小瀬 博之（総合情報学部教授）
テーマ：カーボンニュートラルの実現に向けて私たちは何ができるか？

この講義では、SDGs の目標 7（エネルギー）、12（生産・消費）、13（気候変動）、15（陸上生態系）に関連する共通課題である「カーボンニュートラル（脱炭素社会）」を中心に取り上げた。まず、受講者の関心を把握しながら「2030 アジェンダ」と SDGs の基本理念、そして社会・環境・経済のトレードオフについて説明し、東洋大学川越キャンパスのリデザイン事例も紹介した。グループワークに向けて、「カーボンニュートラル」「ネイチャーポジティブ」「サーキュラーエコノミー」といった持続可能な環境を目指す行動や、大学での実践例（「こもれびの森・里山支援隊」「SPRING ウォーターサーバープロジェクト」など）を紹介した。グループワークでは「カーボンニュートラル、ネイチャーポジティブ、サーキュラーエコノミーに向けて大学で実施すべきこと」をテーマに、ペーパーレス化やリユース促進、省エネ・再生可能エネルギー導入、自然保護、環境教育、食品ロス削減など多様なアイデアが発表され、これらの情報を共有できた。

SDGs 実践講座第 6 回 講義要旨
１０ 月 24 日（金）

講師名：南野 奈津子（福祉社会デザイン学部教授）
テーマ：移民・難民と私たち：共生社会へのカギ

本講義では、SDGs の目標 3、10、16 をテーマとして、移民、難民との共生について考える機会とした。世界の難民の実情を概観した。そのうえで、難民受け入れに賛成・反対の立場でのディスカッションを行い、難民の理解と共生がどのように可能かについて学んだ。複数の立場を設定し、それぞれがどのような観点からその意見を支持するのか、実際にロールプレイに基づくディスカッションを行った。ディスカッション後、相手の意見を聞いて何を感じたか、を考えた上でそれを共有した。最後に、どのようにして共生が可能かをグループにてディスカッションを行い、共有した。賛成、反対をどのような観点から考えるのか、誰にとっての利益を考えていくのか、について考えるきっかけになったことがアンケートでも示されており、個々の意見は様々ながらも、難民や移民の受け入れや共生が単純な答えではないこと、考え、知識を持つことの重要性について認識できた様子が窺えた。

SDGs 実践講座第 7 回 講義要旨
11 月 7 日（金）

講師名： 堀本 麻由子（文学部教授）
テーマ： 「対話的な深い学びへのアプローチ」

本講義は、SDGs 17 ゴールに関し、「自分ごと」として理解したことを、主体的な行動として行動変容につなげる力を育むこと、さらにこれまでの授業内容を振り返りつつ、対話的なディスカッションを通して、問題・課題（ＳＤＧｓ17 ゴール）への取り組み方を考えることをねらいとした。はじめに、「対話的なディスカッション」に関する講義を行い、その後グループ演習を実施した。各グループは 17 ゴールの内の関心の近い学生同士による４～５名程度の編成とした。各自の問題関心を深めるため、質問中心の話し合いによる自己紹介ワークなどを活用し、グループメンバーの互いを理解することで、共通関心を探る機会とした。すでに SDG s アンバサダーとして活動している学生も数名おり、ファシリテーター的な役割を担い、話しあいを進めてくれた。また比較的少人数のグループだったこともあるが、他キャンパスからオンラインで参加している学生たちが問題なく、議論に参加できていたのが印象的だった。

SDGs 実践講座第 8 回 講義要旨
11 月 14 日（金）

講師名：外部講師（卒業生　勝又　栄政）
テーマ：ジェンダー・セクシュアリティから社会を考える

本学社会学部の卒業生であり、トランスジェンダー当事者の視点から、ジェンダーに関する講義が行われた。SDGs 目標 5「ジェンダー平等を実現しよう」とは男性・女性の平等に関する目標であり、LGBTQ+については厳密には含まれていないというお話から始まり、LGBTQ+について学ぶ回となった。勝又さんは、幼いころから性の違和感を感じており、その社会的背景には「男女二元論」が存在し、「男性は青、女性は赤」であっ

たり「男性は格好のいいものを好む、女性は可愛いものを好む」といった固定観念が違和感を生んでいることの説明があった。性別は二つではなく、詳細にはもっと多数の性別が存在し、世の中にはそのことを公言せずに生活している方も多くおり、最初から決めつけた発言をするのではなく、誰もが回答に違和感のないような質問を心掛けることが大切であると伝えられ、締めくくられた。

SDGs 実践講座第 9 回 講義要旨
11 月 21 日（金）

講師名：北脇 秀敏（国際学研究科教授）
テーマ：開発途上国の生活環境改善に向けて

講義では、まず MDG s から SDG s へ世界的な開発目標が移り変わった過程を紹介した。先進国から途上国への国際協力が中心課題であった MDG s と比較し、「誰一人取り残されない」SDG s に変わり多くの人に受け入れられたことを述べた。次に途上国の生活環境を守る重要な要素として水供給、し尿・排水処理、廃棄物処理の 3 つの公共事業が途上国住民の健康に関係する要素であり、健康的な生活を送るためには、これらが破綻のない形で実施されていることが必要なことを述べた。講義において特に強調した点は、これらの不備があるとどのような健康上の問題点があるかという点に加え、途上国において生活環境を改善する上でどのような適正技術を導入すれば良いかという点にも考察を加えた。また東洋大学の卒業生が途上国の環境改善に青年海外協力隊員として活躍している様子も紹介し、聴講生がどのようにこうした活動に関われるかの議論も行った。

SDGs 実践講座第 10 回 講義要旨
11 月 28 日（金）

講師名：榊原 圭子（社会学部教授）
テーマ： VUCA の時代に豊かなキャリアをどう作るのか？

本講義では、以下について説明、議論を行った。
VUCA とは、不確実性・予測不能性・複雑性・曖昧性が高まる現代社会を示す概念であり、このような時代には「正解のあるキャリア」を外部に求めることが難しくなる。そのため、自分が何を望み、何を大切にしたいのかを主体的に考え、行動する姿勢が重要である。現代の日本では、終身雇用制の崩壊や長寿化による労働期間の長期化があり、従来のように一つの企業に依存する働き方が成り立ちにくくなっている。こうした環境変化に対応する考え方である「プロティアン・キャリア」が注目されている。これは環境に応じて柔軟に働き方や学び方を変える姿勢である。また、長寿化により、学び直しや転職が一般化し、個々のキャリアはますます多様化していくという背景からも、「プロティアン・キャリア」という考え方が求められる。講義の中では、聴講生に問いを投げて発言を求めるなど、双方向の授業を展開した。

SDGs 実践講座第 11 回 講義要旨

12 月 5 日（金）

講師名：廣津 直樹（生命科学部教授）
テーマ： 見える飢餓と見えない飢餓―植物科学からの挑戦―

本講義では、SDGs の目標 2「飢餓をゼロに」をテーマに講義を行った。まず、世界の飢餓状況について説明し、このような食料問題の原因と解決策についてグループワークで意見を出し合った。社会的手段としては気候変動対策やフードロス対策、国際協力など、技術的手段としてはストレス耐性作物や栽培技術の改善など幅広い意見が出された。次に、ビタミン A や鉄、亜鉛などの栄養素の不足という目に見えない飢餓“hidden hunger”の状況と今後の予測について紹介し、「”hidden hunger”の対策と予想される問題点」についてグループワークで意見を出し合った。目に見えない栄養素について啓蒙教育が必要であることを確認した。様々な学部の学生が集まる本講義では、グループワークにより様々な視点の意見が出された点が特徴的であった。最後に、文理融合の必要性と教育を受けている者の責任について投げかけ、講義を総括した。

SDGs 実践講座第 12 回 講義要旨

12 月 12 日（金）

講師名：伊藤　暁（理工学部教授）
テーマ：まちや住まいの持続可能性を妨げない建築設計

建築設計の観点から、まちや住まいの持続可能性について考える講義を行った。日本の人口が減少に転じ、これまでとは社会の構造が異なってきていること、これまでの社会構造を前提に設計された行政・産業・福祉などのシステムが機能不全となっていることなどを確認し、過疎化・少子高齢化が著しく進行している徳島県の神山町を事例に、これからの社会のあり方を想像する知見を共有すること目指した。
社会には「地理的な時間」「社会的な時間」「個人の時間」が共存しているという、フェルナン・ブローデル（歴史家）の指摘をもとに、短期的な時間軸や利益獲得のみに拘泥するのではなく、中期的・長期的な選択肢を阻害しない思考の重要性を解説した。講義後は、「良い社会とは何か」をテーマにグループディスカッションを行い、その内容の発表・共有を行った。

SDGs 実践講座第 13 回 講義要旨

12 月 19 日（金）

講師名：大塚 佳臣（総合情報学部教授）
テーマ：水道水を考える

SDGs 目標 6（安全な水とトイレを世界中に）の主題の 1 つである水道水をテーマとして扱った。世界および日本における水道水の普及状況や課題を解説した。日本は蛇口の水を直接飲用できる数少ない国で、水道水

の質が高いにも関わらず水道水をそのまま飲用する人は13%にとどまることを紹介した。あわせて、水道水の飲用方法には5つのパターン（そのまま飲む、浄水器を使う、煮沸する、主にお茶にする、飲まない）があり、それぞれのパターンへの帰属は、水道水質不安、健康問題意識、環境問題意識、などの影響を受けているという調査結果を示した。情報提供の前には、水道水、市販のボトル水の「聞き水」を行い、水道水と味のイメージの評価が一致しないことを実感してもらった。
以上を経て、1）水道水を直接飲用する人と飲用しない人では意識や経験にどういう差があるのか、なぜそうなったのか、2）飲用しない人に蛇口の水の飲用の推進をしていく上で、なにをしたらよいか、グループで討議を行い、最終的に蛇口の水の飲用を推進するための方策の提案をグループごとに行った。

SDGs 実践講座第14回 講義要旨

1月9日（金）

講師名：子島 進（国際学部教授）／佐藤　麻利絵（国際学部 非常勤講師・筑波大学助教）
テーマ：平和と公正をすべての人に―中東から考える―

住民へのジェノサイドがつづくパレスチナを筆頭に、内戦下のイエメン、内戦は終了したが未だ不安定なシリア、そして2025年末に全国的な規模で民衆の反政府デモが始まったイラン。中東の状況は「平和と公正をすべての人に」というSDGｓの取組が、きわめて多くの困難をともなうものであることを指し示している。今回の講義では、パレスチナ問題やシリア内戦の歴史をごく簡単に説明したうえで、これらの難民の主要な受け入れ先の一つであるヨルダンでの支援について紹介した。日本で暮らす私たちに入って来る紛争や内戦の情報は、対立する集団間の緊張の激化や、戦いの凄惨さに関するものが多い。今回、争いの場から避難した何百万人という人々を支援するNGO、とりわけ草の根レベルで地道に支援を継続するイスラーム系の団体について説明した。これにより、受講生の多くにとって「イスラームという宗教が争いを生んでいるのでは？」という偏った見方を、より複合的なものに変える契機となったものではないだろうか。

以上

★2025年度　SDGs実践講座　受講前/受講後アンケート結果
回答者数：受講前25名　受講後25名

1.1 SDGsの項目をいくつ知っていますか。

受講前

知っている目標の個数	回答
1	0
2	2
3	1
4	3
5	2
6	2
7	1
8	0
9	3
10	0
11	0
12	0
13	0
14	0
15	1
16	0
17	10
一つも知らない	0
合　計	25

受講後

知っている目標の個数	回答
1	0
2	0
3	1
4	1
5	1
6	0
7	0
8	0
9	1
10	0
11	0
12	3
13	0
14	0
15	1
16	0
17	17
一つも知らない	0
合　計	25

1.2　SDGsの目標のうち、現在あなたが最も関心を持っているものを一つ上げてください。

受講前

最も関心を持つ目標	回答
1:貧困をなくそう	2
2:飢餓をゼロに	1
3:すべての人に健康と福祉を	1
4:質の高い教育をみんなに	4
5:ジェンダー平等を実現しよう	3
6:安全な水とトイレを世界中に	2
8:働きがいも経済成長も	1
10:人や国の不平等をなくそう	1
11:住み続けられるまちづくりを	3
12:つくる責任つかう責任	1
13:気候変動に具体的な対策を	3
14:海の豊かさを守ろう	1
15:陸の豊かさも守ろう	1
16:平和と公正をすべての人に	1

受講後

最も関心を持つ目標	回答
1:貧困をなくそう	3
2:飢餓をゼロに	1
3:すべての人に健康と福祉を	1
4:質の高い教育をみんなに	4
5:ジェンダー平等を実現しよう	2
6:安全な水とトイレを世界中に	1
8:働きがいも経済成長も	
10:人や国の不平等をなくそう	
11:住み続けられるまちづくりを	4
12:つくる責任つかう責任	1
13:気候変動に具体的な対策を	4
14:海の豊かさを守ろう	2
15:陸の豊かさも守ろう	
16:平和と公正をすべての人に	
17：パートナーシップで目標を達成しよう	2

1.3　あなたは、設問２で挙げた目標の実現に向けて、何かを実践しようと計画していますか。

受講前

(していない)1←3—5→7(している)	回答
1	7
2	3
3	4
4	3
5	4
6	2
7	2
合　計	25

受講後

(していない)1←3—5→7(している)	回答
1	2
2	1
3	2
4	6
5	7
6	4
7	3
合　計	25

1.4　あなたは、設問２で挙げた目標の実現に向けて、既に計画の実践の段階に入っていますか。

受講前

(していない)1←3—5→7(している)	回答
1	13
2	1
3	3
4	3
5	2
6	2
7	1
合　計	25

受講後

(していない)1←3—5→7(している)	回答
1	4
2	4
3	3
4	8
5	4
6	1
7	1
合　計	25

★2025年度　SDGs実践講座　受講前/受講後アンケート結果
回答者数：受講前25名　受講後25名

1.5　設問３と４のいずれかでSDGsの目標実現に向けた実践を計画している、または、既に実践段階に入っていると回答した人（５～７のいずれかを選択した人）は、具体的に、どのようなことを実践しようと、あるいは、既に実践していますか。自由に記述してください。

受講前

・食べきれる量だけ料理を作ったり、賞味期限・消費期限を意識し、期限が近いものから使うなど、食品ロスを減らす。
・主に家庭での節約やECO電気への転換など。
・住んでいる地域や海辺でのゴミ拾いに積極的に参加したり、企画もしている
・「無料法律相談部」というサークルで相談会を行い、市民の方と司法とのアクセスの機会をつくっています。
・桐ヶ丘地域で、朝活に参加し、地域の方とコミュニケーションをとっている
・「地域交流団体 紡ぎ」というサークルで、今後、大学生と地域を繋げられるような取り組みができたらいいなと考えている。
・SDGsアンバサダーとして活動し、まずは自分自身のSDGsに関する知識を深めたり、他の学部学科の人がどんなSDGsゴールに興味があるのか知ったりするようにしています

受講後

・不要な照明や家電の電源をこまめに切ることを意識し、無理なく節電行動が継続できるようにしています。
・子供たちに学習支援を行うボランティア活動に参加しようと考えています。
・生命科学部の取り組みである「タコクル」にも所属しており、地域に寄り添ったSDGｓ活動に取り組んでいる。
・大学で食品についての知識を身に着け、将来は食品会社で手軽に栄養を取れる機能性食品を作り、味や役割の幅を広げたいと考えている。海外の方にも届けることができれば、栄養不足で体調不良や病気になる人々を減らせるのではと考える。
・卒業論文のテーマとして「キャンパス内の資源循環（バイオマスおよび水循環）モデル」の研究を行っている。具体的には、大学内で排出される廃棄物や水資源のデータを収集・分析し、環境負荷を低減させるための循環システムを設計・提案しようとしている。
・授業の中でグループメンバーが提供してくれた情報で、ゴミを集め、それを工芸品に加工して発信・啓発に活用するという取り組みです。これらは、大学生でもすぐに取り組むことのできる実践的な活動だと思います。
・地元で衰退しつつあるりんごの共選所で、地元の人が集まれる場をつくりたい。地元の人と、りんごを買いに来たお客さんがゆるやかに交流し、ちょっとお茶を飲みに集まれるような場所をつくって地元に貢献してみたいという野望がある。

1.6　あなたには、SDGsの目標のうち、設問２で挙げたもの以外にも、大きな関心を抱いているものがいくつありますか。個数を選択してください。(選択必須)

受講前

設問２で挙げたもの以外に関心を抱く目標の個数	回答
1	2
2	9
3	1
4	2
5	3
6	0
7	1
8	2
9	1
10	0
11	1
12	1
13	0
14	0
15	0
16	0
他には関心がない	2
合　計	25

受講後

設問２で挙げたもの以外に関心を抱く目標の個数	回答
1	3
2	4
3	4
4	4
5	3
6	3
7	0
8	1
9	0
10	0
11	0
12	0
13	0
14	1
15	0
16	2
他には関心がない	0
合　計	25

1.7　設問６でひとつでも「ある」と回答した方に尋ねます。設問２で挙げたものと設問６で挙げたものを、あなたなりに関連付けて考えていますか。（考えていない）1←3—5→7（考えている）

受講前

（考えていない)1←3—5→7(考えている)	回答
1	2
2	1
3	2
4	2
5	7
6	0
7	8
無回答	3
合　計	25

受講後

（考えていない)1←3—5→7(考えている)	回答
1	0
2	2
3	1
4	6
5	5
6	1
7	9
無回答	1
合計	25

★2025年度　SDGs実践講座　受講前/受講後アンケート結果
回答者数：受講前25名　受講後25名

1.8　あなたは、SDGsの目標のうち設問２で挙げたものについて、自分の考えを社会に強く発信していますか。
（発信していない）1←3—5→7（発信している）（選択必須）

受講前

（発信していない）1←3—5→7（発信している）	回答
1	16
2	4
3	3
4	2
5	0
6	0
7	0
合　計	25

受講後

（発信していない）1←3—5→7（発信している）	回答
1	6
2	7
3	5
4	4
5	3
6	0
7	0
合　計	25

1.9　設問７で、SDGsの目標のうち設問２で挙げたものについて、自分の考えを社会に強く発信していると回答した人
（５～７のいずれかを選択した人）は、具体的に、どのようなことを発信しようと、あるいは、既に発信していますか。
自由に記述してください。

受講前

受講後

・友だちやバイト先の人に誰もいないなら消してから帰るようにお願いをしている。
・地震などで影響を受けた家庭への支援などのボランティアを探している
・17_パートナーシップで目標を達成しようにに特に関心があり、他者を傷つけない会話を意識しています。
・すべての人に健康を届けるために、食糧問題は非常に重要な課題であり、未来の食べ物を確保するために、環境問題もかかわってくる。そこで地球を少しでもきれいにするために、ごみ拾いイベントに多く参加したり運営にかかわったりしている。

1.10　あなたは、SDGsの目標の実践が社会をより良いものにすると思っていますか。
（思っていない）1←3—5→7（思っている）（選択必須）

受講前

（思っていない）1←3—5→7（思っている）	件数
1	0
2	0
3	3
4	0
5	3
6	2
7	17
合　計	25

受講後

（思っていない）1←3—5→7（思っている）	件数
1	0
2	1
3	0
4	2
5	4
6	4
7	14
合　計	25

1.11　あなたは、SDGsの目標の実践があなた自身を成長させると思っていますか。
（思っていない）1←3—5→7（思っている）（選択必須）

受講前

（思っていない）1←3—5→7（思っている）	回答
1	1
2	0
3	1
4	1
5	5
6	2
7	15
合　計	25

受講後

（思っていない）1←3—5→7（思っている）	回答
1	2
2	0
3	0
4	3
5	6
6	6
7	8
合　計	25

1.12　設問11で、SDGsの目標の実践があなた自身を成長させると思っていると回答した人（５～７のいずれかを選択した人）は、
具体的に、どのような点で成長できると思いますか。自由に記述してください。

受講前

・周りと協働することを通じて、自身も成長できると思う。
・日常生活の様々な事象に対して、多面的に考えられるようになる。
・SDGsの目標に取り組むことで、課題に対する理解を深め、将来に生かせる力を身につけていくことができると考えています。
・既存のコミュニティーからぬけだす努力をすることが成長につながると思います。
・もっと責任感を持って行動できるようになる。広い視野(人だけでなく世界全体)を持って考えながら行動できる人になる。
・企画を考えることで発想力が鍛えられると思います。また社会人に必要なスキルを身に着け始めることができると思います。
・日々の生活の中で社会を考えるということ、また、これからの未来を考えるということ、多様な価値観を身に着けることに繋がると思う。
・持続可能な社会をつくるために、周りを見渡す力が鍛えられると思っている。
・SDGsを実践することで視野を広くしてくれる点で成長に繋がると思う。
・自分では気づかなかった視点や考え方に触れることによって、行動する際の選択肢の幅が広がり成長できると思います。

★2025年度　SDGs実践講座　受講前/受講後アンケート結果
回答者数：受講前25名　受講後25名

受講後

・SDGsの目標の実践には、人と人とのかかわりが不可欠です。誰かのことを思うことが思いやりを持つことに繋がり、社会全体の効用を考える力に繋がると思います。
・SDGsの目標を実践することで、自分とは異なる立場や背景を持つ人の状況を想像し、物事を多面的に考える力が成長すると考える
・SDGsの目標を実践することで、社会や周囲の人のことを「自分ごと」として考えられるようになり、視野が広がると感じています。環境問題や多様性、健康などに意識を向けて行動する中で、今まで気づかなかった課題に目を向ける力や、相手の立場を考える思いやりが育つと思います
・自分だけではなく、他者の生きづらさに気づくきっかけになると思います。
・今までSDGsの目標はそれぞれ独立したものだと思っていましたが、相互的に関わっているものも多くあり、事象に対して様々な角度から解決していく姿勢は、社会に出てからでも大切な素養だと思ったから。
・人々はこうした大きなテーマを達成してこそ、社会のあらゆる面で持続的な発展を実現できると思います。そのために貢献できることは、とても誇りに感じられることです。
・個人がすべての問題を解決することはできないと思うが、一人ひとりが自身の興味のある分野に対して自分なりに考えアプローチしていくことは、自分が社会の中で生きる一人の人間としての自覚であったり、他者を思いやる気持ちの面で成長できるところがあるのではないかと思う

1.13　あなたは、SDGsの目標の実践を通じ、仲間たちと連携しながら社会に貢献しようと考えていますか。
（考えていない）1←3—5→7（考えている）（選択必須）

受講前

(考えていない)1←3—5→7(考えている)	回答
1	0
2	0
3	1
4	3
5	4
6	5
7	12
合　計	25

受講後

(考えていない)1←3—5→7(考えている)	回答
1	2
2	2
3	4
4	3
5	5
6	4
7	5
合　計	25

1.14　あなたは、SDGsの目標の実践に際して、仲間たちと連携しながら社会に貢献していますか。
（していない）1←3—5→7（している）（選択必須）

受講前

(していない)1←3—5→7(している)	回答
1	11
2	0
3	1
4	3
5	6
6	0
7	4
合　計	25

受講後

(していない)1←3—5→7(している)	回答
1	5
2	4
3	3
4	4
5	4
6	1
7	4
合　計	25

★2025年度　SDGs実践講座　受講前/受講後アンケート結果
回答者数：受講前25名　受講後25名

1.15　設問13と14のいずれかで、SDGsの目標の実践を通じ、仲間たちと連携しながら社会に貢献しようとしている、あるいは、既に貢献していると回答した人（５～７のいずれかを選択した人）は、具体的に、どのような貢献をしようと、あるいは、既に貢献をしていますか。自由に記述してください。

受講前

・来年からPR会社に勤務するため、PRという手法を用いて社会課題を投げかけたい。
・ユニクロなどのいらない服を提供するボランティアなどでSDGsの目標に貢献したいと考えている。
・海外ボランティアに参加しようと考えている
・TUEPの活動で廃クレヨンとレジンを利用したキーホルダーを制作し、資源を有効活用する取り組みを行いました。 このような活動を仲間と協力しながら進めることで、環境負荷を減らすと同時に、リサイクルや持続可能な社会づくりの大切さを伝えられるよ
・点訳サークルを作り、視覚障害について知ってもらう機会やボランティアとして活動する人を増やせるように活動しています。
・SDGsアンバサダーのメンバーと一緒に様々なゴミ拾いの企画や食品ロスをなくすための企画を実行中です。
・地域のボランティア活動などにも参加して、積極的に自分の取り組みを広げていくことでも貢献していきたいと思います。
・福島の被災地を訪れ、地域の方々との交流や現地見学を行うボランティア活動に参加しました。今後もこのような活動に積極的に参加し、仲間と協力しながら地域社会に貢献していきたいです。

受講後

・これからもエネルギーの無駄遣いについては人々に訴えていきたいと思っている。使っていないのに流しっぱなしの水や電気を止めてとお願いするだけでできる。また、エネルギーが有限であるという点も絡めると説得力が増し、より効果があると思う。
・Diversity　Voageに参加して教育と多文化共生についてフィールドワークする
・私はSDGsの目標の実践として、身近な仲間と協力しながら「人の成長を支えること」を意識した行動を行っています。具体的には、学習に不安を感じている小学生・中学生に対して、分からない部分を一緒に確認したり、継続して勉強できるよう声をかけたりするなど、学習支援ボランティアで学びのサポートを行っています。
・地域の住民でごみ拾いを行うクリーン作戦というボランティア活動に参加しています。これからも引き続き参加するとともに、周りの方にもこの活動を周知してもらえるよう、発信していきたいと考えています。
・SDGsアンバサダーとして環境やSDGsに関するイベントに出店し、学生同士や学生と企業・自治体が活動内容を共有したり交流したりする場に参加したり、ボランティアとしてゴミ拾いなどの活動にも取り組んだりしている。こうした活動をSDGsアンバサダーの仲間と協力して行い、さまざまな視点に触れながら活動している。
・FGMの現状とSDGsとの関連で私たちができる支援として啓発チラシを導入しようと考えています。活動目的は日本での認知度向上と、偏見のない理解の促進です。

1.16　その他、何かあれば自由に記述してください。

受講前

・17の目標のさらに細かい具体的な目標まで知っておく必要があると思いました。
・この講義で学んだこと、考えたことを、これからのSDGｓアンバサダーの活動や卒業後の生活にも生かしていきたいです！

受講後

・本講義を通じてSDGsについて学ぶことができ、自発的に「自分事」にして取り組めることがいくらでもあるとの自覚できました。

SDGs 実践講座最終レポート①

1. 全体の概要

SDGs という切り口から、多岐にわたる社会的な課題について学ぶことができた。また、所属する学科の講義とは異なり、実践講座ということもあり、社会で実践可能な学びが多く、講義をきっかけとして興味・関心を持ったテーマもあった。

今までは、SDGs というものと真剣に向き合う機会があまりなく、高校生の時に少し、探究活動をしたくらいだった。そのため、なんとなくその言葉を知っているなというくらいの認識であり、詳しい事はよく理解していなかったのが事実であった。しかし、この半年の講義を受けて、社会における課題について、専門性の高い知識に触れながら学ぶことができたため、この講座で学んだことを活かしながらこれからの SDGs について考えていきたい。

考える上での、他社との関わり方という事も講義を通して身に付いたと思う。メンバーと話し合う時の立ち振る舞いなど、講義を重ねるにつれて自己評価としては、良くなっていったと思う。また、グループメンバーと共に、多くのテーマについてディスカッションをしたことで、自分自身になかった意見や考えに触れたことで、私自身の引き出しも増えたと実感している。

2. 心に残った授業回

私が特に心に残った授業回は、第 12 回の伊藤先生の授業である。この講義の中では、主に持続可能なまちづくりについて学んだ。このテーマは、個人的に最も興味・関心を持っていたテーマであったためか、非常に印象に残っている。

特に、講義の中で、最も印象に残っていることは「安易に地域貢献しようと考えない」ということです。近年、日本の課題として地方創生というものがある。地方において、大学生が貢献をしようと考えるときに、始めに「この地域のために何ができるのだろうか」と考える。その考え方は間違いではないし、必要な考えだと思う。しかし、自分が何をやりたいかを考えることが最も重要だと思う。実際、先日の七尾市内において、復興支援活動を行った。その際、地域の方々に言われたことは「自分たちがやりたいことを七尾でやってみな」という事であった。まさに、「安易に地域貢献しようと考えない」ということと同じことであり、とても興味深く感じた。しかし、自分たちがやりたいことに対する熱意や地域の方々の理解は必須であり、この方々との対話がもっともひつようなことであるとも考えるきっかけになった。

3.　身についたこと

私が今回の SDGs 実践講座において、身に付いた事は、「なぜ」という事を大切にして思考するという事です。その一つの例としては、偏見についてであると思う。第８回の講義において、「人は見た目で判断してはいけない」ということを改めて重要であると理解した。そして、この言葉の意味の深さに気付いた。正直、今までの人生の中で、男性女性の判断に関して言語化したことがなかった。そのため、当該の講義において、「いつもどうやって判断している？」という投げかけに対して、戸惑ってしまった自分がいました。このような事を考えたこともなかった自分は、いつの間にかに「男性、女性はこうあるべきだ」という先入観を持ってしまっていたと身に染みて感じた。つまり、「なんで」という問いに対して、自身の先入観や偏見に左右されて、感覚で生きていたということを実感した。そこで、あらゆる物事について考える時は、一度「なぜ」という問い立てをして思考していきたい。この思考を大切にすることで、より物事に対する深い思考ができると思う。それを様々な場面で活かしていきたい。

4.　これからどう活かすか

私は、SDGs 実践講座を受けて、学んだ知識を社会人になっても活かしていきたいと思う。具体的には、私自身、地元の公官庁に就職するので、地元の持続可能なまちづくりに貢献していきたい。例えば、災害についてです。近年、日本において、大規模な災害が多く発生している。災害が起こってしまうことは仕方のない事であるが、それに対して対策することは必ずしなければいけないことである。いかに被害を減らしていけるかという観点を大切にしたい。そして、災害後のまちづくりという、長期的な視点を取り入れながら考えたい。

また、地方公務員ということなので、危機管理以外にも、教育や福祉など SDGs とは切っては話すことのできないテーマを扱う事となる。そのため、今回の一連の講義で学んだことはもちろんのこと、自分自身でも学び続ける姿勢を大切にしていきながら社会にでてもこの講義を活かしていきたいと思う。学ぶなかでも、今回の講義で身に付けることのできた「なぜ」を大切にすることや他者との関わりを大切にすることを活かしていく。そして、SDGs という認知の向上にも貢献していけたらいいなと思う。

SDGs 実践講座最終レポート②

1. 全体の概要

本授業は、私にとって大学に入学してから初めて受講した、SDGs をテーマとする体系的なシリーズ型授業であった。これまでにも学内の SDGs 関連イベントや短期的な活動に参加した経験はあったが、本授業のように一学期間を通して、多様な分野の専門家による研究発表や実践報告を継続的に聞く機会は初めてであり、非常に貴重な学習体験となった。特に印象的だったのは、一回ずつに専門分野の異なる先生が登壇し、それぞれの立場から SDGs に向き合う姿勢や研究内容、現場での体験を具体的に語ってくださった点である。環境、福祉、地域創生、教育、技術開発など、幅広い分野が有機的につながりながら SDGs という共通の目標に向かっていることを実感した。また、授業内容は単なる知識の伝達にとどまらず、「どのような思いで取り組んできたのか」「何を目指しているのか」といった、研究者一人ひとりの人生観や価値観にまで踏み込んでいた点が非常に印象深かった。毎回の授業が、まるで一つの講演会を聴いているかのような密度と深さを持っており、知的好奇心を強く刺激された。自分の国では、ここまで多様な分野の専門家が集まり、学生のためにこのような体系的な授業を行う機会は決して多くないと感じている。その意味で、こうした授業を受けられる環境に身を置いていること自体が非常に幸運であり、大学生としての学びの特権であると実感した。さらに、先生が語る「成功」や「目標」は決して一様ではなく、それぞれ異なる価値観や人生経験に基づいて形成されている点も興味深かった。大きな成果を挙げることだけが成功ではなく、地域に寄り添うこと、弱い立場の人を支えること、環境と共生する社会を目指すことなど、さまざまな「成功の形」があることを知り、自分自身の将来像について深く考えるきっかけとなった。夢や目標を抱きながら成長していく私たち大学生にとって、こうした多様な生き方に触れることは、視野を広げ、進むべき方向を考える上で極めて有意義であると感じた。

2. 心に残った授業回

数ある講義の中でも、特に印象に残ったのが水環境に関する研究である。それまで私は、研究者や専門家の「成果」や「成功」にばかり目を向け、その背後にある膨大な努力や苦労について深く考えることがなかった。しかし、先生のお話を通して、厳しい環境の中での調査活動や、インフラが整っていない地域でのフィールドワーク、長期間にわたるデータ収集と分析といった、地道を要

する作業の積み重ねこそが、貴重な研究成果を生み出していることを知った。特に印象深かったのは、研究のために医療環境が十分でない地域に長期間滞在し、現地の人々と同じ生活環境の中で調査を続けていたというエピソードである。そこでは、病気のリスクや生活の不便さ、精神的な不安など、多くの困難があったにもかかわらず、それでも研究を続ける強い意志と使命感に深く心を打たれた。SDGs の目標は理想的で美しい言葉に満ちているが、それを現実のものとするためには、こうした努力と覚悟が必要なのだと感じた。この経験から、私は「理想を語るだけの空想家」ではなく、「現実に根ざした実践者」であることの重要性を学んだ。机上の空論ではなく、自分の足で現場に立ち、目で見て、耳で聞き、肌で感じた情報をもとに考え、行動することこそが、本当の意味で社会を変える力につながるのだと思う。研究者の姿勢から、困難な状況においても決して諦めず、一歩ずつ前に進む粘り強さの大切さを学び、自分自身の学習態度や人生観を見直す契機となった。

3. 身についたこと

本授業を通して、「大きなことを成し遂げようとする前に、まず身近なことから始める」という姿勢の重要性にも気づかされた。グループワークにおいて、海洋プラスチック問題をテーマに取り組んだ際、私は他大学の事例を参考に、回収したプラスチックを建設現場の資材として再利用するという壮大な計画を提案した。しかし、実現可能性の低さやコスト、制度上の課題などを考慮した結果、グループメンバーから「まずは実行可能な範囲でできることを考えるべきだ」と指摘され、自分の発想の未熟さに気づかされた。その後、メンバーが提案した、地域の清掃活動やプラスチックの工芸品で宣伝するが目的とした啓発イベントなど、より現実的で実行可能な案は、発表時に先生から高く評価された。この経験から、私は「理想の高さ」だけでなく、「実行可能性」や「継続性」が SDGs 活動において極めて重要であることを学んだ。大規模な成果を一気に求めるのではなく、小さな行動を積み重ね、少しずつ社会に変化をもたらしていくことこそが、本当の意味で持続可能な取り組みなのだと実感した。また、自分自身が「他人の成功例を模倣すること」に意識が向きすぎていたことにも気づかされた。確かに成功事例から学ぶことは重要だが、それをそのまま真似するだけでは、自分たちの環境や条件に合わない場合も多い。むしろ、身近な課題を丁寧に見つめ直し、自分たちだからこそできる小さな取り組みを考えることが、より意義深い活動につながるのだと理解した。この学びは、今後の学業や社会活動においても大切にしていきたい視点である。

4. これからどう活かすか

授業を通して、私は今後も熱心で、積極的に大学の SDGs 関連活動やボランティア活動に参加したいと強く思うようになった。身近な地域や学内で起きている問題に目を向け、誰がどのようなことで困っているのかを知り、自分にできることを一つずつ実行していきたいと考えている。大学生という立場だからこそできる活動も多く、知識と行動力、そして柔軟な発想を生かして、社会に貢献する存在でありたいと思う。特に、環境問題や福祉分野、地域支援など、生活に密着した課題に対して、自分自身が当事者意識を持つことの重要性を感じている。単なる「参加者」として活動するのではなく、「問題解決の担い手」として考え、行動する姿勢を大切にしたい。小さな行動であっても、それが積み重なれば、やがて社会を動かす大きな力になると信じている。本授業を通して、SDGs は決して遠い存在ではなく、私たちの日常生活と密接に結びついていることを学んだ。そして、社会をより良くするために、自分自身がどのような役割を果たせるのかを真剣に考えるようになった。この貴重な学びを今後の学生生活、さらには将来の進路に生かし、持続可能な社会の実現に少しでも貢献できる人間へと成長していきたい。

SDGs 実践講座最終レポート③

1. 全体の概要

大学 4 年生、社会人になる前の本学での最後の学びにこの講義を選んだ。この SDGs 講座を受講し、私は改めて「知らない」ということの愚かさ、恐ろしさを学んだ。それは同時に、自分がいかに恵まれているかを実感するものでもあった。本レポートは、自分は良かったで終わらせることなく、困っている人々に自分にできることはないかを改めて考えるものである。ゲスト講師の方に様々なお話をしていただく中でも、特に、「平等」や「人権」を考える講義が印象的であった。「平等」とは何を基準に等しく分けられるものであろうか、「人権」とはどこまでを他人にゆだねることなく主張できるものであろうか。ここには、個人ではなく社会としてのルールがあり、そしてその平等や人権が守られるために「教育」が存在する。毎講義での幾度となる難しい課題の解決策は「教育」にあったように思う。「知らない」ということの恐ろしさを説くにあたり、はじめに、私の最も印象に残っている講義である第 8 回授業「ジェンダー平等」について取り上げる。

2. 心に残った授業回

「他人事ではなく自分事として考えてほしい」という教えがあった。まさに、ジェンダー平等についての講義は、すべての講義の中でも特に「もし、自分だったら」と考えさせられた。私は、教室に入ってすぐ、ゲスト講師の方を見た時から男性だと疑うことなく思った。実際には元々女性として生まれたその方の「自分の性別を何をもって証明しますか」という問いかけは、人を先入観で決めつけている自分を改めて考えさせられるものであった。ゲスト講師の方が自身の経験を語る中で「なぜそのような見た目、恰好をしているのか」と聞かれることが辛かったと語っていた。なぜという純粋な疑問は時に意図せずとも人を傷つけてしまうこと、その傷はその人の中で少しずつ大きくなっていってしまうこと、改めてコミュニケーションの難しさを感じた。また、オリンピックを例に挙げ、トランスジェンダーの選手を受け入れるかについては、誰の思いを尊重するかという点で難しい議論であった。皆に平等にするとすれば、人権を守るとすれば、トランスジェンダーの方を受け入れるべきである。しかし、実際にはそうであれ元々男性だった事実を踏まえれば、体格差や、身体で競う競技であればあるほど受け入れる側として女性の方は恐怖心を抱くだろう。平等のためのトランスジェンダーの受け入れにより、女性が恐怖を抱くことは、

返って平等を壊すことであり、トランスジェンダーの方も望んでいないと感じた。

3. 身についたこと

白か黒かはっきり決められないものが世の中には無数に存在している。そんな中で、自分の価値観にそぐわないものや、グレーに遭遇した時、目をつむってしまうことや、排除しようとしてしまうことがある。本講義を通して、そのような未知との遭遇や受け入れがたい事象に対し「その背景にあるものは何か」を考える力が身についた。例えば、自分には同性、つまり女性を恋愛対象として好きになる理由がわからない。もっと言えば、講義であったような異性として自身が存在したいと考える人の気持ちもわからない。そうした感情を持つ人が存在していることは知っていたが、実際に、トランスジェンダーの方のお話を聞くまでは、ただの興味関心の延長戦のようなものの先に男性になりたいという気持ちがあるような気がしていて、そんな感情に気が付いてしまった人を心の中でどこか憐れんでいたように思う。しかし、当事者のお話を聞き、それが可哀想なことではなく、軽い感情でもないこと、他人が否定して良い感情ではないことを実感した。まさに、なぜそのような考え・行動に至ったのか「背景を考えること」が他者を理解することに繋がると感じた。

4. これからどう活かすか

どうしたらもっと住みやすい世の中になるか。私の頭の中に浮かぶのは、この世界に生きる人々が笑顔でいる景色であった。この笑顔は、たくさんの人々にバックグラウンドがある事を想像し、他人を知ろうとする努力の上に成り立つものであると考える。何か相容れないもの、人と出会ったときに、相手を知り、理解しようとする姿勢をこれからも忘れてはならないと感じる。「知らない」ということは、あらぬ誤解を招き悲しみを生んだり、誰かが我慢をすることに繋がってしまう恐ろしいことだと感じた。知らなかったでは済まされない世の中の片隅に追いやられてしまっている人々がたくさんいる。世界に笑顔が増えるために、隅まで光が差し込むために、知ろうとする努力が今の私にできる最初の一歩だと感じる。

最後に、様々な SDGs 観点からの世の中の事象を話し合う中で、このような話し合いができる環境にいること、事象の外で意見を考える立場にいること自体が当たり前ではないと感じた。この当たり前ではない環境に感謝し、感謝で終わらせることなくこの気づきを困っている人々への力に変えられるよう、知ること、考えること、そして、自分事として捉えることをこれからも続けていきたいと思う。

SDGs 実践講座最終レポート④

1. 全体の概要

SDGs 実践講座を受けてみて自分の考えが変わった気がする。受講する前は、17の目標をたててそれが達成されなくても何の罰則もないので正直何のために存在するかが分からなかった。しかし受講を重ねていくうちに、それらの目標がメインではなく、世界で主に問題になっていることを解決するための目標を集めた結果、17 個になったのではないかと考えたからである。漠然と環境問題に関心があったのでそれを深めて学んでいくつもりであったが、多様なテーマに触れることで自分が知らない世界を知ることができた気がする。また、実際に専門家や当事者の方のお話を聞くことでイメージができる講座だったと思う。そこで気をつけていたのはバイアスがあるということである。専門家の方たちといってもそれぞれの考え方があるため、あくまで私は私の考えという気持ちでお話を聞いた。また、グループワークがある回が多数だったが、自分の意見を持つこと、つまり主体性を大切にした。他人の意見を聞くということも大事なのだが、自分に主体性がないと他人の話にきちんと耳を傾けることができないからである。自分にとってどれだけ難しい問いであったとしても間違ってもいいから自分の意見を持ち発表するということを大切にした。全体を通して実行できたと思う。講師の方からもグループの仲間からもとても良いお話が聞けた貴重な講座だったと思う。

2. 心に残った授業回

私が心に残ったのは水道水についての授業である。私たちは日本に住む人として水道水が安全であることは理解しているはずなのになぜ水道水を積極的に飲まないのかということを考えたことがなかった。なぜなら自分自身も水道水は飲用としていないからである。いつも浄水機能がついた水道や市販のペットボトルの水を購入して飲んでいる。ここでなぜ水道水を飲まないのかグループで改めて考えた。飲まない理由としてみんなの意見で多かったのは、昔から周りの人が飲んでいないからということだった。やはり家族同士で行動や慣習は似てくる。同居している人が昔から水道水を飲まない場合、当然飲まないということで育っていく。しかし、グループの全員で共通していたのは水道水自体は安全だと考えていたということである。ここに例外が存在する。それは、水道がある場所の清潔状態や、味を気にしているため飲むことを避けるということである。トイレの水道の水を飲むかと言われたら飲まないし、美味しくないと感じたらわざわざ飲むことはないだろう。これを踏まえると、安全であることを売りに水道水の飲用を人々に勧める

ことは難しいことである。また、先生から教えていただいた情報だが、マンションは時間帯によって味が変わるということである。マンションは水を大量にストックするため、時間が経つにつれてミネラルが減るため味が悪くなると調べた方がおられるとのことで、私も同じ意見を持った。このように水道水を飲むかは人々の価値観によって決められてしまうため、安全性を訴えるだけでなく、それらがある環境や味を担保して完全な品質の状態の水でなければ飲む人が増えないのかなと考えた。日本の水道水は飲めるのに飲まないというテーマが非常に興味深かったので、印象に残っている。

3. 身についたこと

この実践講座を通して身についたことは何個かある。一つは、先にも述べたようにどんな時も自分の立場をはっきりさせることである。それまでは皆の意見に乗っかることが多かったが、一つ一つのグループワークを意味のあるものとするため、また自分にとっての成長の場とするために自分が努力することの一つである。同様に、他の人の意見を自分の中で消化することも努力した。ただ聞くだけではなくその核心を理解することで、より良いグループワークができると考えたからである。最終的にグループ発表があることを知っていたのでグループ 3 のメンバーがどんな性格でどんな考えをもっているのかを理解することが後に活きてくると考えたからである。もう一つは、自分たちがグループで発表した内容であるが、資源を有限であると改めて理解できたことである。コンセントを挿したりスイッチを押したりすればほとんどの機械の電源が入る。これは非常に簡単なことである。簡単なことだからこそ、そこに資源が使われてることを忘れてしまう。今回、グループ発表の準備を進めていく上でこれを深く認識した。大学生活や日常生活において、無駄になっているエネルギーを少しでもなくしたいという思いが身についた。これは私がこの講座を受講した意味が見出すことができることであると思う。それまではあまり考えていなかったことを理論的に理解できたことで私の今の考えに繋がっている。以上のことが身についた。

4. これからどう活かすか

先にも述べたように、無駄になっているエネルギーをなくすための行動をしていきたいと考えている。私たちが行った発表は非常に身近で実践が容易なことだと思っている。なぜなら、誰も使っていない部屋で付けっぱなしになっている電気のスイッチを切ることがメインテーマだからである。唯一、難しい部分は誰がそれをやるのかということである。みんなスイッチに気づかないであろうという予想もたてている。そこでまず私から始めようと考えている。一人一人の行動を変えるのは難しいが、周りの友人たちの前でスイッチを消す行為をすればそれが良い意

味で伝染していってみんなが消すようになっていくかもしれない。ルールなどで強制しても実行されないと考える。だからこそ、まずは自分がやる。それを周りの人に広める。これが必ず資源を大切に使う行動に繋がると考えている。私たちがグループで発表したことが必ず活きてくると考えている。実際に行動をしているところを出来るだけ多くの人に見てもらうことが一番今回のアイデアを活かせることだと思う。それ以外にも SDGs 実践講座で多くのテーマを学んだため自分が興味を持つテーマも増えた。これからこれらの興味や知識を活かしていくために何かのセミナーやボランティア活動に参加していくことを前向きに検討している。実践講座を意味のあるものにするためにもこれからも SDGs を意識した行動を心がけていきたいと考えている。

SDGs 実践講座最終レポート⑤

1. 全体の概要

本講義を通じて、SDGs の多角的な課題を「知る」ことから始め、自身の内面に在る偏見や無意識の行動を省察する貴重な機会を得た。特に印象的だったのは、ジェンダーや難民、貧困といったテーマだ。トランスジェンダーの講師による対話から、性別とは生物学的側面だけでなく自己の意思が尊重されるべきだと学び、自分の「普通」という前提に潜むアンコンシャス・バイアスを自覚した。又、難民問題やパキスタン出身女性の経験談を通じ、日本社会に根付くステレオタイプや、他国との文化的・宗教的価値観の違いに驚き、共生のための多面的な視点を養うことの重要性を実感した。環境面では、ネットゼロの定義や水道水の飲用、建築学の視点に触れ、技術革新だけでなく個人の心理的障壁や固定観念を打破することが、持続可能な社会への鍵だと学んだ。グループワークでは、他者の異なる捉え方に触れることで対話の有用性を学び、「先ずは自分が変わる」という主体性の必要性を再確認した。

今後は、食品ロスの削減や多様なネットワークの構築など、本講座で得た知見を具体的な行動へ繋げ、より公平で持続可能な社会の実現に貢献していきたい。

2. 心に残った授業回

私が最も心に残った授業会は、第 8 回の勝又先生による講義である。理由としては、私が一番関心の有るテーマであったためだ。トランスジェンダーである講師の方のお話は非常に貴重な経験となった。講義中、勝又先生から「性別の根拠は何か」と問われた際には、これまで深く考えたことがなかった自分に気付かされた。

私は、性別の根拠には「生物学的回答」と「社会的回答」の 2 つが在ると考える。前者は出生時の生殖器に依る区分だが、後者は「自らの心の在り方」だ。生物学的な二元論は存在するが、現代に於いて性自認は自由であるべきだ。たとえ身体的特徴が自認と異なっていても、本人が「男である」と認識するならば、其の意思が尊重されるべきだと改めて感じた。

又、講義内ではアンコンシャス・バイアスにも触れた。私は「普通」という言葉を使わないよう意識してきたが、無意識のうちに男性の友人に「彼女」の有無を尋ねるといった、異性が当然であるかのような問いかけをしていたことに気付いた。こうした無意識の差別は、自覚が無いからこそ改善が困難だ。今後は自身のアンコンシャス・バイアスを常に疑い、真に多様性を尊重できる姿勢を身につけていきたい。

3.　身についたこと

全 14 回の講義を通じて身についたことは、単なる知識の習得に留まらず、多角的視点で社会を捉え、アンコンシャス・バイアスを客観視する姿勢だ。

第一に、物事を二元論で判断しない柔軟な思考が身についたと考える。性別を「生物学的」と「社会的」の双方から捉える視点や、環境問題に於けるメリット・デメリットの表裏一体性を学んだことで、正解が一つではない複雑な課題に対し、粘り強く向き合えるようになった。第二に、自身の内側に在る当たり前を疑う力が養われた。「普通はこうだろう」という前提が、他者への無意識な差別に繋がる虞が有ると気付けたことは大きな収穫である。特にジェンダーや難民、異文化交流のトピックを通じ、自分とは異なる背景を持つ人々の視点に立って物事を再考する重要性を痛感した。

最後に、対話を通じて知見を広げる実践力が身についた。グループワークでは、同一の文章から正反対の情景を読み解くような他者の感性に触れ、独りでは到達できない多面的な考えを得られた。今後は、食品ロスの削減といった身近な行動を継続しつつ、常に自分の発言に意識を持って多様性を尊重できる社会の一員として歩んでいきたいと考える。

4.　これからどう活かすか

講義を通じて、SDGs の達成には理解だけでなく、個人の意識の変化と小さな行動の積み重ねが不可欠であることを学んだ。此の気付きを、今後の生活に於いて以下の三点で活かしていきたい。1 つ目が、アンコンシャス・バイアス」継続的な自省である。「普通」という言葉に潜む先入観が他者を傷つける可能性を常に念頭に置き、性別や国籍、境遇に基づいた決めつけを行わないよう努めていく。特に、将来のキャリア形成に於いては、プロティアン・キャリアの考え方を採り入れ、組織の固定観念に縛られず、多様な価値観を持つ人々と協力して新たな価値を創造できる人間を目指したい。2 つ目は、多角的視点を有った対話の実践だ。グループワークで学んだ通り、1 つの事象でも立場が違えば捉え方は大きく異なる。意見の対立を恐れるのではなく、自分とは異なる背景を持つ人の視点を積極的に取り入れることで、物事を多面的に捉える力を養い続けたい。3 つ目は、知ることを起点とした具体的な環境行動だ。食料廃棄の削減や、資源の無駄を省く選択等、日常生活の中で自分にできる第一歩を継続する。複雑な社会課題に対し「自分一人が変わっても」と諦めるのではなく、個人の変容が周囲へ、そして社会へと繋がっていくことを信じ、主体的に行動していきたい。

SDGs 実践講座最終レポート⑥

1.全体の概要

本授業では、SDGs を軸に、人生百年時代における生き方、在日外国人と就職の問題、持続可能な街づくり、水資源問題、難民問題など、現代社会が抱える多様な課題について学んだ。これらのテーマは、一見すると自分とは距離があるように感じられるものも多いが、授業を通じて、それぞれが私たちの日常生活や将来と深く結びついていることを理解することができた。特に、ニュースなどで断片的に知っていた社会問題を、SDGs という共通の枠組みで捉え直すことで、問題同士のつながりや構造的な背景について考える機会となった点が印象的であった。

また、本授業では単に課題を知るだけでなく、それぞれの問題が相互に関係し合っていることにも気づかされた。例えば、教育や就労の機会格差は、貧困や移民問題とも結びつき、将来的な社会の持続可能性に影響を与える。こうした視点を持つことで、個別の問題を断片的に捉えるのではなく、社会全体の構造として理解する重要性を学んだ。SDGs は目標そのものを達成すること以上に、社会の在り方を考え続けるための指針であると感じている。総括して、本授業は、社会課題を単なる知識として学ぶだけでなく、「自分事」として考え、主体的に向き合う姿勢の重要性を学ぶ授業であったと感じている。

2.心に残った授業

第 1 回授業で扱われた在日外国人と就職の難しさというテーマは、韓国人の父を持つ私にとって非常に身近であり、強く印象に残った。授業では、外国籍の人は帰国の可能性があると見なされやすいことや、言語や文化の違いが職場でのトラブルにつながると懸念され、安定した職に就くことが難しい場合があると学んだ。父自身から直接そのような経験を聞いたことはなかったが、アルバイト先で働く外国人の同僚から、ビザ更新への不安や、日本で生活を続けるために就職を目指しているという話を聞いていたため、授業内容が現実の問題として強く実感された。また、面接で差別的とも取れる質問が行われている現状を知り、多様性が重視される社会においても、国籍や出身による無意識の偏見が残っていることにショックを受けた。同時に、出身国によって質問内容が異なる可能性がある点にも問題意識を持った。

一方で、外国にルーツを持つことを弱みではなく、マルチリンガルといった強みとして捉え、就職活動に活かす事例を知り、自分自身の就職活動にも通じる学びを得た。この授業を通じて、自分は「どこかの誰か」ではなく、唯一無二の存在であることを再認識するきっかけとなった。

3.身についたこと

本授業を通して身についた最も大きな点は、社会問題を「他人事」としてではなく、「自分とつながる問題」として考える視点である。SDGs で扱われるテーマは規模が大きく、個人では解決できないように感じてしまいがちであった。しかし、授業では、これらの社会問題が私たちの日常の選択や行動と深く結びついていることが繰り返し示されていた。例えば、外国人労働者の問題は、私たちが利用するサービスや働く職場の環境とも関係しており、無意識の偏見や言動が差別を生む可能性があることを知った。また、水問題や環境問題も、日常の消費行動や資源の使い方によって状況が左右される。このように、社会課題は特別な誰かの問題ではなく、私たち一人ひとりの行動の積み重ねと大きなつながりがあることを理解した。その結果、問題を知るだけで終わるのではなく、「自分はどう関わることができるのか」「何ができるのか」を考える姿勢が身についたと感じている。また、自分は違うからいい、という考え方ではなく、異なる立場や背景を持つ人々の視点を想像し、多角的に物事を見る力も養われた。これは、今後社会で生きていく上で重要な力になると考えている。

4.これからどう活かすのか

今後は、本授業で学んだ視点を日常生活や将来の行動に活かしていきたいと考えている。特に、在日外国人や難民、水問題などについて、ニュースをただ受け取るのではなく、「なぜその問題が起きているのか」「自分の立場から何ができるのか」を考える習慣を続けたい。また、考えるだけで終わらせず、ボランティア活動や地域の取り組みなど、実際の行動につなげていくことも目標である。SDGs の達成は一人では難しいが、主体性を持って行動する人が増えることで社会は少しずつ変わると学んだし、実際に行動に移している人と授業を通して関わることができ、とても貴重な関わりができたと思う。

さらに、社会問題に関心を持つだけでなく、正しい情報を見極め、自分の考えを言葉にして周囲と共有する力も大切にしていきたい。SNS やニュースで流れる情報を鵜呑みにするのではなく、その背景や立場の違いを考えることで、より冷静で建設的な視点を持つことができると思う。また、外国にルーツを持つ人々が置かれている状況について、自分自身の経験を踏まえながら発信することで、身近なところから理解を広げる役割を果たしていきたい。本授業で得た学びを、今後の人生においても大切にし、社会の一員として責任ある行動を取っていきたい。

SDGs 実践講座最終レポート⑦

1. 全体の概要

本授業では、SDGs（持続可能な開発目標）を単なる国際目標として学ぶのではなく、私たちの日常生活や価値観と結びつけて考えることが重視されていた。貧困や環境問題といった分かりやすいテーマだけでなく、ジェンダー、不平等、文化、アイデンティティなど、社会の中で見えにくい問題にも焦点が当てられていた点が印象的である。授業を通して、SDGs は「遠い世界の話」ではなく、自分自身の考え方や行動と密接につながっているものだと理解するようになった。特に、社会の中で当たり前とされている価値観や制度が、誰かを無意識のうちに排除している可能性があるという視点は、自分にとって新しい気づきであった。この授業は、知識を得るだけでなく、自分の立場や社会との関わり方を問い直す機会を与えてくれたと感じている。また、本授業ではディスカッションや事例紹介を通して、他者の意見に触れる機会が多く設けられていた点も特徴的であった。自分とは異なる価値観や経験をもつ人の考えを聞くことで、SDGs の課題には一つの正解があるわけではないと実感した。特に、同じテーマであっても立場によって問題の見え方が異なることを学び、社会問題を考える際には多角的な視点が不可欠であると感じた。このような学びは、座学だけでは得られない貴重な経験であった。

2. 心に残った授業回

心に最も残っているのは、LGBTQ を扱った回である。特に印象的だったのは、社会が前提としている「性別二元論」が、どれほど多くの人を無意識に苦しめているかという点であった。男女のどちらかに当てはめることが当然とされる社会では、その枠に当てはまらない人の存在が見えにくくなってしまう。私はそれまで、「差別はいけない」と頭では理解していたものの、自分自身が性別二元論の中で物事を考えていたことに気づかされた。例えば、書類の性別欄や、恋愛の前提など、日常の中にある小さな「当たり前」が、実は誰かを排除している可能性があると知り、強い違和感を覚えた。この授業を通して、LGBTQ の問題は特定の人だけの問題ではなく、社会全体の仕組みの問題であると感じるようになった。さらに、LGBTQ の授業では「理解すること」と「当事者になること」の間には大きな隔たりがあるという指摘が印象に残っている。自分が多数派である限り、完全に当事者の感覚を理解することは難しいかもしれない。しかし、その難しさを自覚した上で想像し続ける姿勢こそが重要なのだと感じた。これまで当たり前だと思っていた社会の仕組みを疑うことは簡単ではないが、その一歩を踏み出すことが、包摂的な

社会につながるのではないかと考えるようになった。

3. 身についたこと

SDGs の授業を通して身についたと感じるのは、物事を「構造的に考える視点である。これまでは、社会問題を個人の努力や意識の問題として捉えがちであった。しかし、授業を通して、不平等や差別は個人の問題ではなく、制度や価値観、歴史的背景によって作られてきたものであると学んだ。その結果、「なぜそうなっているのか」「誰にとって不利になっているのか」を考える習慣が身についたと感じている。また、自分が多数派に属していることで、無自覚に享受している特権があるという視点も重要な学びであった。SDGs を学ぶことは、正解を知ることではなく、自分の立場を相対化し続ける力を養うことなのだと感じている。加えて、SDGs の授業を通して、自分の意見を言語化する力も身についたと感じている。社会問題について考える際、漠然とした違和感を抱くだけで終わってしまうことが多かったが、授業ではその違和感の理由を説明することが求められた。その過程で、自分の考えを整理し、他者に伝えることの難しさと重要性を実感した。この経験は、今後レポート作成や議論を行う上でも大いに役立つものである。

4. これからどう活かすか

今後は、SDGs の授業で学んだ視点を、日常生活や将来の進路選択の中で活かしていきたいと考えている。具体的には、身近な会話や SNS で見かける偏った意見に対して、安易に流されずに考える姿勢を持ち続けたい。また、誰かを一つの属性だけで判断するのではなく、その人が置かれている社会的背景にも目を向けることを意識したい。大学生である自分にできることは大きくないかもしれないが、無意識の差別や排除に気づき、それに疑問を持つことはできると感じている。SDGs の授業で学んだことは、将来どのような道に進んだとしても、人と関わる上での基盤になるものであり、これからも自分の中で考え続けていきたい。また、将来社会に出た際には、効率や成果だけでなく、その過程で誰かが不利益を被っていないかを考えられる人でありたいと感じている。SDGs の授業で学んだ視点は、企業活動や行政、地域社会など、あらゆる場面で応用できるものである。自分一人の行動が社会を大きく変えることは難しくとも、その意識を持つ人が増えることで社会は少しずつ変わっていくのではないかと考えている。

SDGs 実践講座最終レポート⑧

1. 全体の概要

SDGs について、単に 17 の目標の内容を知るだけで終わるのではなく、まずそれぞれの目標の「定義」を正確に理解するところから始まった。そして、その定義を知った上で、自分たちがもともと抱いていたイメージと現実との間にどのような乖離があるのかを考えることが、この授業の大きな軸だった。例えば「1.貧困をなくそう」という目標について、私はこれまで、貧困は主にアフリカなど南の国々で起きている問題だと思っていた。しかし実際の統計を見ると、1 日 2.15 ドル未満で暮らす「絶対貧困」に苦しむ人々は長期的には減少傾向にあることを知った。そこで見えてきたのは、私たちが向き合うべき貧困は、遠い国の話だけではなく、日本国内に存在する相対的貧困や子どもの貧困、教育格差など、より身近で見えにくい問題でもあるという事実だった。このように SDGs の各目標を一つひとつ紐解き、思い込みを見直しながら、自分たちの生活や地域社会と結びつけて考え、本当に自分に何ができるのか、どのような行動が小さくても社会の変化につながるのかを主体的に探していく姿勢が求められる授業であった。また、知識を得るだけでなく、自分の価値観そのものを問い直すきっかけにもなった。

2. 心に残った授業回

第 12 回の伊藤先生の授業が印象に残った。徳島県神山町を舞台にした建築、持続可能なまちづくり、自然との共生についての講義だった。

先生の講義の中で「自分が関わる建築が持続可能な社会を壊すものになるのは死んでも嫌だ」という言葉が印象的だった。この言葉は私が SDGs に関する未来に向けて行動することの本当の意味を問い正すきっかっけになったと思う。私は今まで SDGs 実践講座を受講して、色んな先生の講義、グループディスカッションを通して新しい知識、考え方を得て、これを活かしていまの世界をよりよくしたいと考えていた。最終回で行ったプレゼンテーションも教育について過去から振り返ってこれからの日本の地域格差を是正する解決策を提唱した。しかし、それが今だけを良くして未来には繋がらないケース、逆に未来を壊してしまうリスクもあると考えたことがなかった。変えるからには過去だけでなく未来の責任も持たなくてはいけない。伊藤先生の講義はそのような新しい見解を与えてくれたと思う。これから自分が関わることが持続可能な社会を壊さないか、今の社会だけよくするものではないのかという疑う姿勢も大切だとわかった。

3.　身についたこと

SDGs 実践講座を受講して「物事を批判的に捉える力」が身に付いた。本講座では、ほぼ毎回 SDGs の各テーマについてディスカッションを行った。扱われる課題は、環境、経済、社会問題が複雑に絡み合ったものが多く、単純な解決策では対応できないものばかりであった。ある側面を改善すれば別の側面に悪影響が及ぶこともあり、一つの選択が全体のバランスを大きく崩してしまう可能性もある。そうした議論を重ねる中で、私は物事を一方向からではなく、多角的に検討する姿勢の重要性を学んだ。また、問題を客観的に捉えることの大切さも実感した。感情や先入観に左右されず事実に基づいて考えることで、より中立的な立場から意見を述べることができるようになった。一方で、客観性を重視しすぎると当事者の思いや背景を見落としてしまう危険性があることにも気づいた。課題の本質を理解するためには、データだけでなく人の立場や感情にも目を向ける必要がある。この講座を通して、私は一つの問題に対して複数の視点を持ち、客観性と当事者意識の両方を意識しながら考える力を養うことができた。これは SDGs に限らず、これから社会の課題に向き合ううえで欠かせない力であると感じている。

4.　これからどう活かすか

SDGs 実践講座を受講する前、私は志望動機として「大学進学における地方格差を是正したい」と考えていた。講座を通してさまざまな課題について学ぶ中で、この関心はより具体的な問題意識へと深まった。最終プレゼンテーションでは、現在の大学進学における地域間格差の現状をデータに基づいて分析しその背景や理由を考察した。教育格差の解決策として教育目的の国債発行など、教育機会を広げるための施策を提案した。しかし、地方格差の問題は長い時間をかけて形成されてきた構造的課題であり、短期間での抜本的な是正は容易ではないとも感じた。だからこそ、制度面の整備だけでなく、実際に影響を受けている当事者の声に耳を傾ける姿勢が重要であると学んだ。また、進学格差は教育環境だけでなく、家庭の経済状況や保護者の教育観、地域の人口流動などとも密接に関わっており、単独の分野としてではなく、社会全体のつながりの中で捉える必要があると気づいた。

これまでの講座では日本の地域課題を中心に考えることが多かったが、もともと海外への関心も強いため、今後は国際的な視点から SDGs の課題を考え、各国の状況を比較しながら理解を深めていきたい。

SDGs 実践講座最終レポート⑨

1. 全体の概要

このSDＧｓ実践講座は、全１５回毎回違ったテーマに沿って様々な先生から講義を受け、グループになって問題について話し合い自分たちなりの問題の答えを見つけ実践していくことを目的とする授業である。この授業を通してＳＤＧｓに関心を持ち、東洋大学ＳＤＧｓアンバサダーとして活動していくこともできるといった実践をするための準備をすることが出来る面白い講義である。東洋大学の白山だけでなく様々なキャンパスにいる先生や実際に地方で働いている方、様々な経験をしてきた方が先生となり、自分の仕事の分野を SDGｓに絡めて講義してくださる。白山以外の方も参加できるようオンライン参加も可能となっており、どんな方でもＳＤＧｓに向き合うことが出来る素晴らしい講義だ。授業では５グループに分かれそれぞれが意見を出し合い、考えをまとめ発表するという形をとっており、様々な問題に深く学ぶことができ、自分なりの意見を持つことが出来る意味のある講義だ。

2. 心に残った授業回

私が心に残った授業は、8回目の「ジェンダー平等を実現しよう」をテーマにした回である。最初に教室に入った時、講義をしてくださった勝俣先生を見て、「今日は男性の方が講義をするのか」と思った。授業が始まり、先生が体は女性であると知って正直驚いたが、今振り返るとその驚き自体が偏見であったと感じている。特に印象に残っているのは、「今まで隠していたことを話してしまい、嫌われるかもしれない。終わったと感じた」という言葉である。しかし、その話を聞いた友人から「辛かったね。話してくれてありがとう」と言われ、救われたとおっしゃっていたことに強く心を打たれた。私は当事者ではないため、これまでの苦しみを完全に理解することはできない。しかし、誰かに自分を受け入れてもらえることが、その人に安心感や生きる希望を与えるほど大きな意味を持つのだと感じた。また、自分のことを伝える行動は、理解してもらうために避けて通れない試練でもあると感じた。日本では LGBTQ という言葉が少しずつ浸透してきているが、理解はまだ十分とは言えない。だからこそ私は、まず自分が偏見を持たず、誰に対しても平等に接することを大切にしていきたい。それが平等な社会につながると信じている。

3.　身についたこと

私はこの授業を通して、ひとつひとつの問題に向き合う力が身についたと考える。これまで私は、社会問題について考える時間が与えられても、何を考えればよいのか分からず、問題に向き合う姿勢を作ることが難しかった。しかしこの授業では、毎回少人数のグループで一つのテーマについて意見を出し合う時間があり、自分の意見を必ず発言しなければならなかった。そのため、自然と問題について考える習慣が身につき、表面的に捉えるのではなく、背景や原因まで考えようとするようになった。また、他の人の意見を聞くことで、自分にはなかった視点に気づくことも多く、考えを深める大きなきっかけとなった。最初は意見を言うことに不安を感じていたが、回を重ねるごとに小さなことでも自分の考えを言葉にして発言できるようになった。さらに、問題に対して「なぜそう思うのか」と問いを立て、深掘りして考える姿勢も身についた。その結果、問題に向き合うこと自体が苦ではなくなり、考えることを前向きに楽しめるようになったと感じている。

4.　これからどう活かすか

私はこの授業で身につけた力を、大学 4 年間を通してさらに磨き、将来は世界に貢献できる人になりたいと考えている。春休みには Diversity Voyage に参加し、マレーシアを訪れ、多文化共生と教育を掛け合わせたテーマについて学ぶ予定である。現地では 9 日間にわたり、子どもたちや地域の人々と交流し、異なる文化や価値観に触れる中で、自分なりの問いや考えを見つけ、日本に持ち帰りたいと考えている。私は現在チームラボでアルバイトをしており、多国籍のスタッフや世界中から訪れるお客さんと日々コミュニケーションを取っている。その経験を通して、言葉や文化が違っても、相手を理解しようとする姿勢が信頼関係につながることを学んだ。将来はキャビンアテンダントとして、人と人、国と国をつなぐ存在となり、文化や価値観の異なる人々一人ひとりに寄り添い、誰もが安心して過ごせる空間を提供したい。そのためにも、この講義で身につけた問題に向き合い深く考える力を活かし、多様性を尊重し続けられる人でありたい。この目標を実現するために、日常の学びや経験一つひとつを大切にし、自ら考え行動できる姿勢を忘れずに成長していきたい。この目標を実現するために、日常の学びや経験一つひとつを大切にし、自ら考え行動できる姿勢を忘れずに成長していきたい。

SDGs 実践講座最終レポート⑩

1. 全体の概要

授業では、SDGs に関連する、持続可能な社会とはどのようなものなのか実例とともに学んだ。SDGs は たちの生活に関わる多くの課題を含んでいる。人間のみの問題ではなく、地球上全ての生物に影響を与えて いる問題だ。その SDGs の各ゴールで共通して「誰一人取り残さない」という考え方が大事にされている。いずれの授業でも、講師の話を踏まえてさまざまな立場の視点から物事を考え、問題に向き合ってきた。どのゴールにおいても、国や企業などの大きな組織だけが変わればよいのではなく、私たち一人ひとりの意 識や小さな行動から変えていくことが重要だと学んだ。普段の生活の中で何気なく行っている選択や行動が、社会全体に少しずつ影響を与えていることを学んだ。自分自身の行動に責任を持って意識ある行動をし たい。やはり大きな変化を社会にもたらすのは大きな組織の行動であるが、まず知らないと何も始まらない ため、このような授業のような形で問題意識を持つ事、そう言った知識を持った人材を増やすことも重要だ と想った。また、大学で実際に行われている取り組みが具体例として紹介されたことで、SDGs が遠い世界の話ではな く、自分たちの身近な場所でも実践されていることが分かった。グループワークでは、大学でできる環境 の取り組みについての提案が多数上がった。他の学生の意見を聞くことで、自分の考えを見直すきっかけにもなった。さらに第 5 回の講義では、カーボンニュートラルをテーマに、脱炭素社会を目指す取り組みが紹介された。その中で、環境に配慮した取り組みであっても、必ずしもすべてが良い結果につながるわけではないという 現実に気付いた。例えば、再生可能エネルギーの導入や環境にやさしい建物の建設は重要である一方で、皮 肉にも建設の過程で自然環境や生態系に影響を与えてしまう場合もある。授業を通して、SDGs は正解を覚えるものではなく、社会の問題を自分のこととして考え続ける姿勢そのも が大切なのだと感じた。まずは知ることから始め、それを広め、策を考え、実行に移すことの難しさ、そをできる範囲でも実行することに大きな意味があると思った。

2. 心に残った授業回

第 5 回「カーボンニュートラルの実現に向けて私たちは何ができるか？」より、環境にやさしい大型施設を建てる際に、皮肉にも多くの木を伐採する場合があるなど、建設時の矛盾について学んだ事が最も印象に残った。環境に配慮した建物の建設は、SDGs を考慮した、良い心がけだと思っていたし、実際評価されるに値するのがほとんどだ。しかし実際、そのために自然を壊してしまう可能性があるという話を聞き、強く印象に残った。これまで私は、環境問題は「環境に良いことを選べば解決に近づく」と単純に考えていた。しかし、授業をして、何かを選ぶことで別の何かを失ってしまう場合があることを知り、環境問題の難しさを実感した。どちらが正しいのか簡単には決められず、答えが一つではない問題に向き合わなければならないと思った。環境を守ることと、社会の発展や人々の生活を支えることの両立は簡単ではない。それでも、目をそらさずに考え続けることが、SDGs に取り組む上で重要なのだと思った。この回の授業を通して、SDGs は理想論 はなく、悩みながら進めていくものなのだと強く感じた。カーボンニュートラル問題の解決には、多少なりとも新しい建設が必要である。この時、マイナスとプラスの両面を考慮した選択ができれば良いと思う。SDGs が企業や国のアピールポイント要素になりつつある今目の前の利益にくらまずもたらし得るデメリットを考慮する必要がある。

3. 身についたこと

この授業を通して身についたと感じるのは、物事を一つの視点だけで判断しない姿勢である。環境に良い行動であっても、別の問題を生み出すことがあり、その逆もある。どれか一つだけを重視するのではなく、 数の側面から考えることの大切さを学んだ。また、難しい言葉が多い印象があり、理解しようとすることを避けていたが、授業の中で知る事ができた。それらの言葉を身時間感じることもできた。無駄な消費を減らすことなど、身近な行動も SDGs の一部であると知り、自分にもできることがあると感じた。グループワークでは、他の学生の意見を聞くことで、自分とは違う考え方に触れることができた。同じテーマでも考え方や視点が分かれることを知り、話し合いをして理解を深めることの大切さを学んだ。他人の意見が違うのは当然のことであり、その意見の食い違いを話し合いですり合わせ、複数の要素を含んだ解決策を見つけることの難しさも実感した。この経験は、これからの学習や将来の社会生活においても役立つと思う。

今は自分たちが生きていければ良いというような価値観がまだ世界中にあるが、未来の私たちの子孫が生きていけるように、世界に未来を残すことは現代の私たちの使命だと強く感じた。動物は何もしていないのだから、今の環境問題の原因

は人間にある。すなわち人間が諸動物の命を握っている。人間の問題意識を改める必要がある。

4. これからどう活かすか

SDGs、環境問題に対して、出来ることは多様で、大きな組織や企業、国以外でも、一人一人が行動を起こすことで、小さな努力でも大きな力になり得ると、希望を持つ事ができた。例えば、日頃から部屋を出る、電気を消したり、賞味期限を見て計画的に食材を購入するなど、フードロスを目指した行動をとる事ができる。さらに、SDGs について学んだことを、自分の中だけで終わらせるのではなく、友人や家族との会話の中で共有していくことも大切だと感じている。特別な活動をしなくても、話題にすることで意識が広がり、考えるきっかけになるかもしれない。そのような小さな広がりが、結果的に社会全体の変化につながるのではないかと思う。また、この授業を通して、SDGs は「知っているかどうか」から、「どう向き合い、どう行動するか」まで発展させるのが大切だと感じた。これからも、自分にできることを考え続け、少しずつでも行動に移していきたい。

SDGs 実践講座最終レポート⑪

1. 全体の概要

これまでの授業では、持続可能な社会を実現するために、世界共通で定められている SDGs17 の目標について学んできた。授業を受ける前の私は、中学、高校時代に学んだため SDGs 目標については知っていたものの、正直なところ、貧困や教育などの自分の興味がある項目しか詳しく知ろうとしていなかった部分があった。そのため、全体的に SDGs について身近な問題という意識がつかめていなかったり、具体的なイメージを持っていなかった。しかし授業を通して、貧困や飢餓、ジェンダー平等、教育の質、働き方など、私たちの生活や将来と深く関わっていることを知り、考え方が大きく変わった。全 15 回の授業やグループワークを通して、実際の事例を見たり、グループのみんなと意見を出し合ったりする中で、SDGs は決して遠い国だけの問題ではないと感じた。私は人前で自分の意見を言うことがあまり得意ではなかったが、自分の体験と結びつけて考えることで、少しずつ発言できるようになった。この授業全体を通して、SDGs は知識として覚えるものではなく、自分自身の行動や考え方を見直すきっかけになる学びだと感じた。

2. 心に残った授業回

私が最も心に残っているのは、能登半島地震について学んだ授業である。授業では、実際の防犯カメラ映像が紹介され、今までに見たことのないほどの激しい揺れや、人々が立っていられずに倒れ、スリッパのまま外へ逃げ出す姿を見て胸が苦しくなった。一瞬にして家が崩れ、瓦礫の山となる光景や、帰る場所を失って茫然と立ち尽くす人々の姿は今でも強く心に残っている。私たちが毎日安心して生活し、帰る家があることは決して当たり前ではなく、日常のありがたさを深く実感した。また、地震から一年半以上が経っても復興が十分に進まず、仮設住宅での生活が続く人や、心の傷を抱えたままの方が多い現実を知った。さらに、ようやく避難場所が確保できた後に能登豪雨が発生し、避難所が再び浸水したという話を聞き、被災された方々の絶望の大きさを想像すると言葉を失った。この講義は、SDGs の目標 6「安全な水とトイレを世界中に」や、目標 11「住み続けられるまちづくりを」と深く関わっていると感じた。災害時にはトイレが使えず不衛生になり、子どもがトイレを我慢するために水を飲まなくなるという話を聞き、衛生や健康の問題が命に直結することを痛感した。この授業を通して、災害への備えや支援活動に関心を持ち、自分にできる形で行動していきたいと強く思うようになった。

3.　身についたこと

SDGs の授業を通して身についたことは、物事を多面的に考える力である。以前の私は、ニュースや SNS で見た情報をそのまま信じてしまうことが多く、深く考えることはあまりなかった。しかし授業で学ぶ中で、一つの問題には必ず複数の立場や背景があり、簡単に正解を出せるものではないと知った。例えば、環境を守るための取り組みが、誰かの仕事や生活に影響を与えてしまう場合があることを知り、考えることの難しさを感じた。グループワークでは、自分とは違う意見を聞くことで、新しい視点に気づく経験をした。最初は自分の意見に自信が持てなかったが、話し合いを重ねるうちに、「間違ってもいいから考えを伝えることが大切」だと思えるようになった。また、相手の意見を否定せずに聞くことで、より良い答えに近づけることも学んだ。さらに、普段の生活の中でも「なぜそうなるのか」「他の見方はないか」と考える習慣が少しずつ身についてきた。この授業を通して、自分の考えを持つことの大切さと同時に、他者の考えを尊重する姿勢も身についたと思う。これからは、与えられた情報をそのまま受け取るのではなく、自分なりに考え、判断できるようになりたい。この力は、SDGs だけでなく、学校生活や将来、社会の中で課題に向き合う際にも必ず役立つと感じている。

4.これからどう活かすか

これからは、授業で学んだことを、日常生活の中で意識して行動に移していきたいと考えている。これまでは、環境問題や社会課題について「大切だとは思うけれど、自分一人にできることは少ない」と感じていた。しかし、この授業を通して、身近な行動の積み重ねが持続可能な社会につながることを学んだ。例えば、必要以上に物を買わないことや、買った物を長く大切に使うことは、今の自分にもすぐに取り組める身近な行動である。新しい物を簡単に買い替えるのではなく、本当に必要かどうかを考えることで、資源の無駄遣いを減らすことができると思う。また、食べ残しをしないことや、電気や水を無駄にしないことも、日常生活の中で意識するだけで実践できる大切な行動である。こうした小さな行動が、環境への負担を減らし、持続可能な社会の実現につながっていくと感じた。

さらに、将来の進路を考えるときにも、自分の仕事や選択が社会や環境にどのような影響を与えるのかを意識していきたい。自分の利益だけでなく、周りの人や地球全体のことを考えて行動できる人になりたいと思う。私はこの授業を通して、「一人の力は小さくても、意識が変われば行動は変えられる」ということを学んだ。これからも SDGs を意識しながら、無理のない範囲で自分にできることを少しずつ続けていきたい。

SDGs 実践講座最終レポート⑫

1. 全体の概要

今回の SDGs 実践講義では今まで知らなかったことを知る機会であり、これからの人}において有意義な時間であった。また、この講義ではただ教授たちの話を聞くだけの講義ではなく、それぞれの班のメンバーとその講義のテーマについての意見交換をしたり、ディスカッション形式で話したり、班で出た意見をまとめ上げ人前で話したり、各々のテーマに沿った班での発表など受動的に講義を聞くことが中心だった中学校・高校の授業では受けられなかった形式であり、また自分の意見を直接人に伝えることは自分の中にある考えを言語化することや相手にどうやったら伝えやすいか、相手の意見と自分の意見を踏まえての発表の原稿の作り方など難しいことに気づき、その気づきは私に人生においてとても貴重なものであり成長の第一歩であった。そして、複雑な社会課題については、特に多様な視点が重要になるので、ディスカッションという経験を通じて自分とは異なる考え方に触れることで、日本や海外で起こっている社会・地域問題への理解が深まった。

2. 心に残った授業回

私が特に心に残った授業は主に二つある。

一つ目は４．世界と日本の子どもの貧困について考えよう（小野　道子　福祉社会デザイン学部准教授）である。理由としては、私が高校の英語の授業でフードバンクや貧困について知ることがあり、そこから貧しさで困っている人が発展国である日本でもいることや日本での生活では感じることのない厳しい世界の発展途上国での生活状況に衝撃であり、そこから困っている人を助けたいという思いから国家公務員になりたいという夢を抱き、其の目標に向かって高校時代では部活と学業を両立に取り組み、グローバル教育が盛んである東洋大学に進学した。

そんな自分にとってはぴったりであった授業であったが、この授業では高校では習わなかった深い日本のひとり親家庭の貧困状況やその対策についてやレジリエンスなどの内容の授業であった。そこから、2024 年の元日に起こった能登半島地震の被災地に行く東洋大学のボランティア活動に興味を持った。

二つ目は６．移民・難民と私たち：共生社会へのカギ（南野　奈津子　福祉社会デザイン学部教授）である。理由としては、youtube や Instagram などで移民についてのストーリーがよく出てくるようになり、クルド人問題や移民問題について興味を持ち、どう彼らと共生できるかを考えたからである。そこで父親がシンガポールに赴任しているため、実際に昨年の八月に二週間ほど行ってきた。シンガポー

ルは移民で成り立っているといってもいいが、シンガポールは日本みたいに、移民問題は特には深刻化はしてなかった。私なりに推測すると、シンガポールは経済成長に不可欠な分野の優秀な人材は、高給与要件の就労ビザで優遇し、永住権・市民権取得も促し、自国の経済発展のために移民を受け入れたり、外国人の労働者に対しての法での厳格な管理などの政策があるからではないかと思う。

これは移民問題が深刻化している日本でも適用すべき政策であると思う。南野教授の講義では「移民との共生はどうやったら可能なのか」という問題を与えられ、班のメンバーでどうすればよいのかをディスカッション形式で話し合い、「自治体で難民を 100 人（子ども、高齢者を含む 30 家族）を受け入れることになりました。今後語学教育、住居等を 2 年間提供し、その後日本で働く道も用意するようです。経費 1 億円をねん出するために、全住民に給付する予定だった給付金（一人当たり 3 万円）を廃止する」という場面の想定で賛成意見と反対意見に分かれたが、改めて意見をまとめることや話し合うことの難しさを痛感した。

3. 身についたこと

私は、批判的思考力と公務員としての基礎力の二つが SDGs 実践講座で身につくことができた。批判的思考力とは構造的な原因を分析する力のことであり、「なぜその問題が起きているのか」「どんな政策が効果的なのか」を多角的に考える力を身につくことができた。本レポートでも書いたが、シンガポールの例は参考例であり、最初はこのシステムを日本にも適用すべきであると考えてきたが、この講義やその中の活動であるディスカッションを通じて、各国の歴史的背景や社会構造、価値観の違いによって、その国に有効的な政策は異なることを理解することが出来た。シンガポールの成功要因を分析することは重要だが、それをそのまま日本に当てはめるのではなく、日本の文脈に合わせてどう応用できるかを考える必要がある。また、将来国家公務員として働く上で必要な基礎力を身につけることができた。例えば、一つ目は批判的思考力である。これは構造的な原因を分析する力のことであり、「どんな政策が効果的なのか」を多角的に考える力である。本レポートでも書いたシンガポールの例は参考例であり、実際に現地を訪れて多民族社会の一面を観察できた。しかし、この講義やディスカッションを通じて、経済面で移民を選別する仕組みは効率的であるが、人道的な点では課題があることを学んだ。このように、一つの事例を表面的に捉えるのではなく、その背景にある構造や限界まで考える力が養われた。

4. これからどう活かすか

先述の通り、私は国家公務員になりたいと考えているが公務員では省庁で実際に政策を作る際に多様な意見を聴取し、判断する力が求められており、この講義で

は話し合いなどの機会が設けられており、公務員を目指すうえで生かすことができた。また、今回学んだ異なる意見を尊重しながら自分の考えを述べるスキルは、今後のゼミや専門的な議論の場で直接活きると思うし、また現場を見て理論と結びつける姿勢も身につくことができ、大学での学びへの活かしたいと思った。

SDGs 実践講座最終レポート⑬

１．全体の概要

今回の SDGs 実践講座は、今世界で起きている多くの問題を知る機会であり、これからの自分の生き方を考えるうえで貴重な学びの機会であった。また、議題に対してグループメンバーと議論し、同じテーマを選んだメンバーたちと長い時間をかけて意見を交換しあい、スライド資料を作って発表した。相手に対してどうすれば自分の意見が伝わるのか、どうすれば相手に不快な印象を与えないようにすることができるのか、どうすれば違う学部・学科・年齢の人とうまくコミュニケーションができるか、発表の仕方をどう工夫するかなど、これから社会に出ていくうえで必ず必要になる能力を同時に養うことができるとても良い機会であった。今までは、自分の意見に自信がなく、発言することが苦手であったが、今回の講義を受けて、メンバーと協力しながらよりよい結論を導き出すために自分の意見を出すことができるようになった。そして、本講義を受講して SDGs の１７の目標の具体的に問題になっている事項についての理解も深まり、それが文化的な問題や、心理的な問題、地域的な問題や、政治的な問題など、それぞれの問題が複雑に絡み合って日本や世界で起こっていることを理解した。

２．心に残った授業回

私が心に残った授業回は、主に２つある。

一つ目は、第３回の前口さんの講義である。この回は、能登半島地震のお話を中心に被災者のトイレの問題についての内容だった。私は、一度東日本大震災で計画停電を経験したことがある。幼い頃の話ではっきりとした記憶はないが、母によると、当時は寒い季節だったため暖房が使えなかったのは辛かったといっていた。トイレに関しては苦労をしていなかったが、少しの時間電気が使えないだけで苦労するのに対して、能登半島地震などの大きな地震の被災者はいつ終わるかもわからない長期間の避難生活を余儀なくされ、断水のため、トイレが使用できない状態で過ごさなければならない。もともと私は飲料水や食料が重要だと考えていたが、生活用水が必要であるとともに簡易トイレなども重要であると理解した。二つ目は、第６回　移民・難民と私たち：共生社会へのカギ　難民に焦点をあてて（福祉社会デザイン学部子ども支援学科　南野奈津子）である。特に印象に残った言葉として「自分という存在は何も変わらないのに自分の努力ではどうにもならないことで人生が大きく左右され、人から排斥されるのはとても辛いこと」というものがある。これは本当に辛いことだと思い、強く心に残った。自分の立場に置き換えて考える必要があると思った。

３．身についたこと

私は、本講座を受講して、論理的思考力やコミュニケーションスキル、世界で起こるさまざまな問題に対して、自分事として考える力を身につけることができた。相手の話にしっかり耳を傾けると共に、自分の意見を相手がわかりやすいように説明する力をグループディスカッションとグループワークを通して学んだ。これらのスキルは、第１０回の授業で学んだ VUCA の時代を生き抜くために必要なスキルであり、AI が台頭しても価値を失わないものである。また、第 5 回の授業である「カーボンニュートラルの実現に向けて私たちは何ができるか？」で学んだことを活かして、おやまグリーン・アクションプロジェクト森づくり実践編というボランティアに参加した。そこで、専門家の話を聞きながら、二人一組になって森に生えている古くなった竹を協力して切り、その伐採した竹を粉砕機に入れ肥料にした腐葉土を作った。これをすることで古くなった竹を有効に再利用できると共に、荒廃した森に日光が通り草木が元気になり、森全体が生き返る。この活動は多様な生き物が暮らす豊かな森や竹林を、誰かに頼るのではなく、自分たちの手で守り、未来に受け継ぐ活動である。これからもこうした自分たちの力で自然環境を守るボランティアに参加したいと思う。

４．これからどう活かすか

私は、この講義で学んだことを活かして、今後も継続的にグループワークの講義やボランティアに参加し、さまざまな経験を積み重ねることで、本講義で学習したスキルを実践し、学んだことを忘れずにしっかりと身に付けたいと思う。また、社会人となっても、外国籍の人たちに対して偏見をもたずに、その人の能力や努力を正当に評価するなど、自分にできることを実践していこうと思う。そして、変化の激しい VUCA の時代だからこそ自分軸をもって、人や物事の本質を見極める目を持ち、先入観や固定観念にとらわれない姿勢を持ちながら SDGs の目指す世界になるように、身近なことから努力を重ねていこうと考える。そこで、私の関心のある環境保全の活動を行っている、東洋大学　川越キャンパスの「こもれびの森里山支援隊」の活動にぜひ参加していきたいと考えている。この活動は、伐採した木や枝で薪や、チップ化、キノコの栽培などさまざま森林資源利用を実習している。この活動も人任せではなく自分たちの手で地域の環境保全をし、生物多様性を確保するためのものである。こうした活動に積極的に参加し、自分にできることを広げていきたいと思っている。また、SDGs アンバサダーになって東洋大学に在学中も SDGs に貢献していこうと考えている。

SDGs 実践講座最終レポート⑭

１．全体の概要

本講義では、SDGs を軸に、世界や日本が抱える様々な社会問題について学んだ。貧困や教育、食、環境、水、ジェンダーなど、一つひとつのテーマは異なるが、どの問題も互いに関係しあっており、単独では解決できない構造を持っていることが印象的だった。例えば、貧困の問題は教育や健康、ジェンダー不平等とも深く結びついており、一つの側面だけを見ても本質的な解決にはつながらないということを具体的な事例を通して理解することができた。特にこの授業では、単に知識を得るだけでなく、グループワークや発表を通して、自分たちで考え、言葉にする機会が多く設けられていた点が特徴的である。意見を出し合う中で、自分とは異なる視点に触れることができ、同じテーマでも捉え方が人によって大きく異なることを実感した。また、実践講座という名の通り、現実の社会問題を「自分から遠い話」として終わらせず、なぜその問題が起きているのか、どのような背景や構造があるのかを考える姿勢が求められたと感じた。最終回のグループ発表では、これまでの授業で学んだ内容を踏まえながら一つのテーマを深く掘り下げることができ、授業全体の学びを整理する機会にもなった。この講義を通して、SDGs は単なる理想論ではなく、現実の社会問題と向き合うための考え方であることを実感した。

２．心に残った授業回

私が特に心に残っている授業は、第 4 回の「世界と日本の子どもの貧困について考えよう」の授業である。この授業では、貧困は単にお金がない状態だけを指すのではなく、教育や医療、栄養、家庭環境など、様々な要素が重なって生じていることを学んだ。特に印象的だったのは、子どもの貧困は本人の努力ではどうにもならない場合が多く、生まれた環境や社会の仕組みによって将来の選択肢が大きく左右されてしまうという点である。

また、絶対的貧困と相対的貧困の違いや、支援が必要であっても周囲からは見えにくい「見えない貧困」についても扱われた。外からは普通に生活しているように見えても、実際には十分な食事や学習環境が確保されていない子どもがいるという話は、自分の中にあった貧困のイメージを大きく変えるものだった。この回で学んだ内容は、その後のグループ発表で取り上げた FGM 問題とも重なっていると感じた。FGM も、貧困や教育機会の不足、社会的に弱い立場に置かれていることが背景となり、女の子が自分の意思を持てないまま影響を受ける問題である。第 4 回の授業を通して、社会問題を個人の責任として捉えるのではなく、その背後にある構造や不平等に目を向ける視点の大切さに気づかされ、この気づきが発表のテーマを考える上での土台になったと感じている。

３．身についたこと

本講義を通して身についたと感じるのは、社会問題を一つの側面だけで判断せず、その背景や構造まで考えようとする点である。授業を受ける前は、貧困やジェンダー問題といったテーマを、個人の努力や意識の問題として捉えてしまうことがあった。しかし講義を通して、それらの問題は、制度や習慣、経済状況、社会の価値観などが複雑に関わり合う中で生じており、当事者が自分の意思だけで状況を変えることが難しい場合が多いことを学んだ。

特に、子どもの貧困や FGM 問題を扱った回では、社会帝に弱い立場に置かれている人ほど声を上げにくく、その結果として問題自体が見えにくくなっている現状が印象に残っている。支援が必要であっても周囲から気づかれにくく、問題が表面化しにくいという点は、自分がこれまで抱いていた社会問題のイメージを見直すきっかけになった。また、「知らないこと」そのものが、問題の放置につながってしまう可能性があることにも気づかされた。

さらに、グループワークや発表準備を通して、正確な情報をもとに考えることの重要性も実感した。資料を調べる中で、事実と意見を区別し、根拠を示しながらまとめることの難しさを感じたが、その過程を通して、物事を丁寧に考え、自分の言葉で説明しようする姿勢が身についたと感じている。

４．これからどう活かすか

本講義で学んだことを、今後、社会問題やニュースに触れる際の考え方に活かしていきたいと考えている。これまでは、貧困やジェンダー問題などを目にしても、「大変な問題だ」と感じるだけで終わってしまうことが多かった。しかし授業を通して、そうした問題の多くは個人の問題ではなく、社会の制度や慣習、価値観と深く結びついていることを学んだ。今後は、出来事の表面だけを見るのではなく、その背景にどのような要因があるのかを考える姿勢を持ちたい。また、子どもの貧困や FGM 問題のように、当事者が声を上げにくい課題ほど、周囲の理解や関心が重要であることを実感した。問題が見えにくいからこそ、知らないままでいることや無関心でいることが、結果的に問題を長引かせてしまう可能性があると感じた。すぐに大きな行動を起こすことは難しくても、正確な情報を知り、安易な決めつけや偏った見方をしないことは、自分にもできることだと思う。

今後の大学生活においても、授業や日常生活の中でも社会問題に触れた際には、無関心で流すのではなく、一度立ち止まって考えることを大切にしたい。本講義で得た視点を意識しながら物事を見ることで、社会の課題と自分と無関係なものとして切り離さずに向き合っていけると考えている。

SDGs 実践講座最終レポート⑮

1. 全体の概要

この講義を受ける前、正直に言うと SDGs にはあまり興味がなかった。言葉はよく聞くが、内容は抽象的で、自分の生活とは少し距離のあるものだと感じていた。しかし、実際に講義を受けてみると、さまざまな分野の講演を通して SDGs が紹介され、考え方が変わった。環境問題だけでなく、食や教育、地域社会など、身近なテーマと深く関わっていることを知り、意外と自分の生活ともつながっていると感じた。特に印象に残っているのは、グループワークで教育について調べたことである。日本では大学進学率が家庭環境によって左右される場合があり、経済状況や親の学歴、住んでいる地域など、本人の努力だけではどうにもならない要因が存在することを知った。これまで進学は個人の意思の問題だと思っていたため、その背景にある社会的な要因を知ったことは新鮮だった。SDGs は遠い理想ではなく、今の社会が抱える現実的な問題を考えるための視点なのだと、この講義を通して感じるようになった。

2.心に残った授業回

最も印象に残っているのは、SDGs の目標 2 である「飢餓をゼロに」に関する講義である。私はこれまで、食料問題は生産量を増やせば解決するものだと単純に考えていた。しかし講義では、先進国で大量の食品が廃棄されている現状や、食料が必要な人に届かない仕組みが問題であることが示され、考え方が大きく変わった。コンビニなどで当たり前のように食品が捨てられていることを思い出し、自分もその状況を見過ごしてきた一人だと感じた。また、私が以前フィリピンを訪れた際の経験とも重なった。現地では十分な食事が取れない人がいる一方で、文化や宗教、生活習慣が深く根付いており、外からの支援が必ずしも簡単ではないと感じたことがある。講義を通じて、支援とは一方的に正しさを押し付けることではなく、相手の背景を理解した上で考える必要があると学んだ。この授業は、SDGs をより現実的な問題として考えるきっかけになった

3.身についたこと

この講義を通して身についたと感じるのは、社会問題を「自分には関係ないもの」として距離を置かずに考える姿勢である。SDGs を学んだことが直接のきっかけかは分からないが、講義期間中に地元の海岸清掃のボランティアに参加した。大きな成果が出る活動ではないが、何もしないよりは行動してみようと思ったからである。実際に参加してみると、ゴミの量の多さに驚き、身近な問題であることを実感した。

また、他のグループの発表で、大学生が地域に溶け込むことの大切さについて聞いたことも印象に残っている。地域活動に関わることで、社会問題を身近に感じる機会が増えるという意見には共感した。SDGs は国や企業が取り組むものだと思っていたが、個人でも小さな行動を通して関われるのだと感じられたことは、この講義で得た大きな学びである。

4.これからどう活かすか

今後は、この講義で学んだことを日常生活や地域との関わりの中で活かしていきたいと考えている。具体的には、今年の夏に地域の盆踊り大会などの行事に、参加者ではなく運営側のボランティアとして関わってみたいと思っている。地域行事の運営に関わることで、地域の人々とのつながりを作り、社会の仕組みをより身近に感じられるのではないかと考えたからである。SDGs は大きな目標であり、すぐに結果が出るものではない。しかし、海岸清掃のボランティアのように、小さな行動でも積み重ねることには意味があると感じている。今後も無理のない形で地域活動に参加し、自分なりの関わり方を続けていきたい。社会問題に対して受け身になるのではなく、少しでも考え、行動する姿勢を大切にしていきたい。

SDGs 実践講座最終レポート⑯

1. 全体の概要

本講義は、環境問題や貧困、ジェンダーといった世界が直面する多様な社会課題について学び、それらを知識として終わらせるのではなく、自ら解決に向けた一歩を踏み出す「実践」を目的とした授業であった。受講前の私は、SDGs に対してどこか遠い世界の出来事のような感覚を抱いていた。ニュースで報じられる深刻な国際情勢や地球規模の環境破壊はあまりに巨大であり、一人の学生である自分にできることなど、ほとんど何もないのではないかという考えを持っていた。どこか「自分には関係のない、大きな組織が取り組むべきこと」として、傍観者の立場を取っていたのが正直なところである。しかし、講義の中で紹介された「世界が 100 人の村だったら」という話が、私の考えを大きく変えた。世界を 100 人の村に縮小して考えたとき、大学で教育を受けることができるのは、わずか 1 人に過ぎないという。大きな社会問題を解決するために必要な知識は、自分が想像しているよりも少ない人しか知らないものだった。その知識を持った者が「実践」に取り組む重要性に納得できた。授業は学生同士の対話やグループワークが中心であり、常に「自分はどう考えるか、自分ならどう動くか」を考え、言葉にする時間となった。水道水の飲用率といった身近な話題から、トレードオフという複雑な概念まで、多角的な視点で社会の構造を捉え直すプロセスを経て、私は「ただの学生」という言い訳を捨て、社会の一員としての当事者意識を持つことの大切さを学んだ。

2. 心に残った授業回

全講義の中で最も私の心に深く刻まれているのは、日本で育った外国籍の当事者であるラウフ・アルーサ・アアリーさんが講師を務められた回である。この回では、パキスタンから 11 歳で来日し、日本の公立小学校へ転校した際の言語面での苦労や、その後の進学・就職活動における具体的な困難についてお話を伺った。

特に衝撃を受けたのは、日本社会での就職活動における「不可視のハードル」についてである。日本で教育を受け、日本人と同等以上の能力を持っていても、外国籍であるというだけで「将来帰国してしまうのではないか」「ビザの手続きが煩雑ではないか」といった企業側のリスクとして捉えられてしまう現実がある。面接では志望動機よりも、「外国人は謝れない」「〇〇国の人はトラブルを起こしやすい」といった、個人の能力とは無関係なステレオタイプに基づいた質問を受けることが多いというお話は、同じ社会で暮らす者として非常に心苦しく、不公平なものに感じられた。アアリーさんは、異国の地で安定した職を得るためには、代替不可能な「希少価値のある存在」でなければならないという覚悟を持って努力を続けてこられた。同じ教室で学び、同じように努力をしていても、国籍という属性一つでこ

れほどまでに選択肢が狭められ、過剰なまでの証明を求められる構造が今の日本には存在する。「彼らも皆さんと同じように、あるいはそれ以上に努力を重ねてきた。どうかリスペクトを持ち、本質を見極める目を持ってほしい」というアアリーさんの言葉は、傍観者であった私の心に強く響いた。SDGs の「誰一人取り残さない」という理念は、遠い異国の話ではなく、まずは自分の隣にいる、見えない壁に苦しむ人々に正当な敬意を払うことから始まるのだと考えた。

3. 身についたこと

本講義を通じて身についたことは、正解のない問いに対して「自分で考える力」と、価値観の異なる「仲間と話し合う力」である。受講前の私は、SDGs のような巨大な課題を前にすると、どこか既存の知識や意見をなぞるだけで満足してしまっていた。しかし、実際の社会課題は複雑に絡み合っており、単純な解決策が別の問題を引き起こす「トレードオフ」の側面を持っている。これを打破するためには、提示された情報を鵜呑みにせず、自分の頭でその本質を問い直す力が不可欠であることを痛感した。ジェンダーに関する回で、「あなたがオリンピックの委員会だったら、性別についてどのように競技を行うか」という話し合いをした。正解がない問いでも、何かしらの答えは出さなければならない状況を実感し、判断の難しさを知った。「自分にとっての現実的な最善とは何か」を悩み抜いた経験は、主体的に課題へ向き合うための土台となった。また、講義の核であったグループワークやプレゼンの準備を通じて、仲間と話し合うことの真の難しさと重要性を学んだ。「水道水の飲用」についてのグループワークでは特に、メンバーそれぞれの背景によって意見が分かれた。このような時、「意見が違う」だけで終わらせず、どうしてそのように考えたのかを伝えあう重要性を知ることができた。ラウフ・アルーサ・アアリー氏の講義でも、外国籍の若者が日本社会で直面する「ステレオタイプによる不当な評価」という問題が語られていたが 、こうした偏見を乗り越えるためにも、人や物事の本質を自分の目で見極め 、対話を通じてリスペクトを構築していく姿勢が欠かせない 。この「考え抜き、話し合う」という活動が、持続可能な社会を築くための最も大切なことだと考えた。

4. これからどう活かすか

私は現在、「点訳ボランティア」「音訳ボランティア」に取り組んでいる。SDGs の「誰ひとり取り残さない」という精神と関係している。講義で身についた「自分で考える力」「仲間と話し合う力」は、ボランティアの現場で活かしていきたい。

ボランティアの善意に頼り、負担が大きい現状はどう変えていけばいいのか。意見の違う人と、どう話し合っていけばいいのか。この講義での活動を意識して取り組んでいきたいと思う。

SDGs 実践講座最終レポート⑰

1. 全体の概要

講義の全体を通して感じたことは、２つある。１つ目が、「知る」ということの重要性だ。なぜなら、この講義を通して知ったことが多かったからである。特に他キャンパスで理系の分野を扱っている先生や外部の方からのお話しが印象に残っている。現代特有の悩みかもしれないが、流行や分野が細分化しているため自分が所属するコミュニティ以外の情報を得るのが難しい、という側面がある。そこにこの授業を通して気づかされた。また、アンテナを張ることや知った後に実際にお話しを聞きに行くこと、対話することの重要性も感じた。2 つ目は、日本が抱えている問題は私が当初想像していた以上に多くある、ということだ。特に法整備の遅れについて授業の終盤でふれる先生が多かった。私自身法学部の学生のため、そこに関心がいっただけでなく、通常の学部の授業だけ受講していると気づけない問題も多くあったため、非常に参考になった。全体的にどの講義でも先生方が取り組んでいる分野の代表的な事例について短時間で考え、答えを出す、ということが多かったがどの回も共通認識を整理するだけでなく、新たな気づきがあり、よい経験になった。

2. 心に残った授業回

特に印象に残ったのは、第 12 回の講義だ。徳島県神山町で行われた「創造的過疎」という言葉が印象に残っている。過疎を受け入れてどうせ減るならクリエイティブに減らしていこうという、あくまでも神山町に元から住んでいた人々が中心となった考え方だったからである。また、活動の中で実際にアートをきっかけに元から住んでいた住民も外部の人と話す免疫がつき自然とキュレーターの役割を担うようになるといったお話も印象的だった。
伊藤先生が設計した神山アーティストインレジデンスも完成までの道のりの中で、戦後復興の中での産業化による木材の可能性の取りこぼしや、林業の循環不全による森林備蓄の高齢級化（木が育ちすぎて太くなっている）といった問題点を先生自身が肌で感じたというお話しを伺い実際に目にしたいと思った。また、時代の変わり目なのだと先生が何度かおっしゃっていたことからも対応の難しさや時代ごとに価値観が変化することも再認識した。
講義の最後に「直近の生活を豊かにすること＝町の持続性を妨げることになってしまうかもしれない」というワードを見て、物事の複雑性を感じた。人の生活を豊かにすることと、街の将来を考えることは一見すると同じことに見えて反対の場合もあるのだと考えるきっかけになった。

3.　身についたこと

身についた力は、2 つある。　1 つ目は、グループで物事を進める際の態度だ。なぜなら、毎授業でグループワークに取り組んだからだ。特に前半は異なるグループに配置され、ほぼ初めましての状態から話し合いをし、結論を出すという部分もあったため苦戦した部分もあった。しかし、学年・学部が違う分話し合いの際に相手の話を一度受け入れるだけでなく、会話しやすい空気にすることの大切さを感じた。また、グループワークを進めるなかで意見を出しやすくすることでグループの独自性が生まれやすい、とも感じた。

2 つ目、柔軟に物事をみることだ。なぜなら、どの先生が講義の最後に伝えていたことは「現状の明確な答えはでていない、みなさんが考えて答えを出さないといけない」という旨の内容だったからである。変化や情報量の多い時代だからこそ、答えや対処がかわることを見越して 1 つの物事を考える力がついたと思う。今後、就活を進めるうえでもこの 2 つの力を意識していきたい。

4.　これからどう活かすか

今後は 3 つのことを生活でも意識したい。1 つ目は他者の立場を考える、ということである。なぜならパートナーシップについて扱った授業の中で日本はまだまだ同性婚に対しての法整備が遅れていると知り、意外な部分が生活の中で弊害になっていることを知ったからである。2 つ目は人と関わる、ということである。キャリアプランについて扱った授業回でそれぞれのキャリア形成が変化していく中でコミュ力が重要ということを授業全体を通して感じたからである。特に、大学や職場以外の人間関係も保持することが望ましいと聞き、今後、社会人になる際も意識したい。3 つ目は世間の情報にアンテナを張ることの重要性だ。この講義を受講して他学年や他学部との繋がりを通して新しい発見があったのはもちろん、他キャンパスの先生の授業を受け、これまで意識していなかった日本の外国に対する取り組みや、日本の現状について学んだからである。おそらく、この講義を受けなかったら議論することがなかったであろう課題についても話すことが良い経験になった。特に、答えを明確に導き出すことが難しいような課題について毎授業の 20 分程度の時間の中で考えたのは今後の社会人生活でも活かしたい。

SDGs 実践講座最終レポート⑱

1 全体の概要

全 14 回の講義を通して、SDGs の各分野を専門とする教授や実務家を招き、それぞれのテーマについて講義を受ける形式の授業であった。各回ではグループワークが行われ、意見交換を通して理解を深めたうえで、各チームの代表者がまとめの発表を行うという構成であった。第 2 回ではシティズンシップ、第 3 回では能登半島で活動する記者による現地の実情についての講義が行われた。第 4 回では子どもの貧困について、絶対的貧困と相対的貧困の違いを学び、第 5 回ではカーボンニュートラル、第 6 回では移民・難民問題を扱った。第 7 回ではコミュニケーションの在り方、第 9 回では SDGs そのものの概要について理解を深めた。さらに、第 10 回では社会の変動、第 11 回では子どもの飢餓や栄養失調、第 12 回では建築を通したまちづくり、第 13 回では水道水、第 14 回では中東の難民問題について学び、SDGs を多角的な視点から考察する機会となった。

2 心に残った授業回

第 5 回目の授業で行われた、廣津直樹先生の講義が最も心に残っている。特に印象的であったのは、「一人ひとりが踏み出せる一歩は限られている」という先生の言葉である。先生ご自身が 30 年近く活動を続けてきたにもかかわらず、その成果は決して大きなものではないと率直に語られていた点が強く胸に残った。このお話を通して、自分ができることを過信するのではなく、現実を見据えながら着実に行動していく姿勢の大切さを学んだ。

また、文系・理系といった学問分野の壁をなくすことや、教育を受けた者が社会に対して果たすべき責任についてのご教示も印象深かった。第 5 回目の講義以降、「教育を受けた者の責任」という言葉が頭から離れず、教授がおっしゃていた村の中で自分は百人に一人の大学生であるという自覚を持ち、これまで以上に授業や学習に真剣に取り組むようになった。

これまでは、まず自分の関心のある環境分野について調べればよいと考えていたが、環境学を学ぶ上では、政治や経済といった他分野の知識も積極的に学ぶ必要があると再認識した。現実的な政策を構想するためには、他分野の専門家の意見を聞くことが近道であると考えるようになった。

3 身についたこと

各分野のエキスパートである教授陣による講義や、同じ志を持つ学生とのグループ活動での議論を通して、物事を多角的に捉える広い視野を身につけることができた。また、その視点を用いて、社会問題をより深く考察する力が養われたと感じている。例えば、難民問題を国内で受け入れる際に、「日本に来たのだから日本の文化に従うべきだ」という考え方は本当に正しいのかという属性論的な視点や、障害とは個人に内在するものではなく、社会が便宜的に引いた線によって生じるものであるという考え方を学んだ。さらに、障害のある人々を支援することは、単なる善意ではなく、人権を守るための社会全体の責任であるという認識を得た。加えて、政策を考える上では、短期的な成果だけでなく、長期的な時間軸を意識することの重要性も理解した。これらの学びを通じて、問題の背景や構造に目を向け、単純化せずに考える姿勢が身についたと感じている。また、「学んだことを実践に移す」意識が高まった点も大きな変化である。具体的には、ボランティア活動への積極的な参加や、資源ロス削減のためにコンポストを作成し植物を育てること、ごみの分別をこれまで以上に徹底するなど、主に日常生活の中で実践的な行動が増えた。

4 これからどう活かすか

本授業を通して身につけた SDGs に関する知見を、今後は発表の場や日常的な発信を通じて積極的に社会へ共有していきたいと考えている。また、知識として学ぶだけでなく、実際の行動へと結びつけることを意識し、身近な場面から実践に移していきたい。これまで私は、環境問題に強い関心を持ち、人権問題や教育格差といった分野への関心が比較的低かった。しかし、本授業を通して、環境問題も人権や社会構造と密接に結びついていることを学び、今後は人権問題についても積極的に学び、相互に関連づけながら考察していきたいと感じた。さらに、文系・理系という枠にとらわれず、多様な分野の知見を横断的に学ぶ姿勢の重要性も強く印象に残っている。加えて、授業内の発表で学んだ省エネ・ビジュアルナッジの考え方を活用し、アンバサダーとしての立場を生かしながら、行動変容を促す取り組みや政策提案にも挑戦していきたい。

SDGs 実践講座最終レポート⑲

1.全体の概要
今回のSDGs実践講座の概要として一言でまとめると、SDG s という抽象的でわかりにくいものを、明日からどういう軸で切っていき実際に行動に移せるかを考えるということが主な目的となっていた。また、内容としては環境問題やジェンダー、建築や貧困といった軸を元手にしてその道で活躍している人の話を聞きつつグループワークを通じ、自分が明日からどうするか？という問いかけが多かったことが印象的であった。

2.心に残った授業回
印象的な授業として今回上げるのは、12月12日の伊藤先生による講義だった。なぜかというと、中山間地域での地方創生を成功させた日本で見たときにそう多くない事例を建築という軸で考えていたからである。私自身、就職活動中には地方創生という軸から企業を探して受けていて、もちろん事例は知っていたとしてもあそこまで完成された事例を知らなかったし、先にも述べた通り建築で地方創生というと石川県白山市の1億円のトイレの事例があって、あまりうまくいかないイメージがあったが、今回の事例はそうではなく作ったものがしっかり機能し、その地域の良さを表すだけでなく建築の作品としても経済効果をもたらしたということが印象的だった。また、今回の事例は色医色なところに活かせるなと感じた。なぜならひとが住んでいる中山間地域はたくさんあり、その多くは高齢化等の問題や環境問題など多くの問題を抱えている。しかしながら、今回のように住民主体で楽しく高齢化を受け入れて行動を起こすことで問題を解消しつつも発展につなげることができるということが印象的だった。また授業中にあった話の中でいうと、時代に適合することで至極真っ当に時代に則ってきたのに、いま使い物にならないという持続可能性が失われているところがあるということが面白かった。確かに、市場原理がここまで発達する前や、アフリカなどの市場原理がまだ浸透しきっていないところでは、自分たちが食べるために作物を作るということが目的となっていることは今までの授業で知っていたし、今回の授業では日本の中山間地域は、今はそのどちらの機能も果たせなくなっているということを知った。実際に、赤井川村でトマトの収穫のボランティアをした際に思ったのは、中山間地域ではないものの、地方になっている赤井川村の農業は基本的に出荷してお金を得ることを目的としていた。だから、栄養価が高く、見栄えの良いものを作り人に売って利益を得ることが前提になっているなと感じていた。これではSDGs達成はまだ遠いと感じた。

3.身についたこと
1つ目に、パートナーシップを取るためには、コミニュケーションをしっかりすることが重要であるということと、自分のことを俯瞰することの重要性を感じた。一点目は、最終発表の準備過程で感じた。私たちのチームははじめ、全く協力ができていない状況だった。同時にみんなのやる気を実際に行動に移してもらうことが課題だった。そのために、チームメンバーにやってほしいことを私が指示を出して協力してもらうことで、なんとか発表ができるようになっ

た。しかし、本来、もっとみんなが協力的に意見を出し合って一つのものにまとめる必要があると感じていて、それを実現するには、コミニュケーションを通じて、話しやすい環境づくりを行うべきだったと感じたのに加え、自分がいまどういう行動をしているか？この発言は適切か？というように、俯瞰視点の大事さを改めて実感するとともに、その能力を少し向上させることができたと思う。2つ目に、立ち止まることの重要性を感じた。これは先のテーマでも話した授業のときに感じたことでもある。先の話にもあったが、真っ当な変化をして、市場原理に則って農業を発展させてきた地方は今、衰退の一途を辿っている。もしこの問題に関してもっと先の時代に考えられていれば、ここまで衰退することもなかったのではないかと思う。

4.これからどう活かすか

私は今回の学びを今後のキャリアとボランティアで活かしていきたい。授業で扱ったプロティアンキャリアと言う話だけでなく、この講座では多種多様な事例を見せてもらったと考えている。例えば、今回取り上げた地方でのホテルの建設の事例や、最近のエコプロなど、この講座を取っていなければ、そもそも考えたり行くことのないものを見るきっかけになった。なので、ここで学んだことを下にして今後に活かして行きたい。具体的には、ボランティアに参加することは社会人になってもできることだと思う。例えば、ゴミ拾いや子供支援などのボランティアは私自身興味があるので、余裕が出たときに参加してみたい。もちろん、能登の復興支援のボランティアのように長期でいくことは叶わなくても、一日だけとかの参加は今後も可能だろう。社会人として忙しくなってもボランティアも自分の世界の見方を変えてくれるかもしれないので、今自分が思っている好きなことを下にしたりこのボランティアなら参加してみたいと思えるようなものに参加して見たいと思う。

SDGs 実践講座最終レポート⑳

1. 全体の概要

15 回にわたる実践講座の授業を通して、環境問題や子どもの貧困、VUCA 等の新しい概念といった様々な社会問題や世界の情勢を知ることができた。SDGs を少しでも達成しようと奮闘する多くの先生方や専門家の皆様のお話を聞くことができ良い学びとなったし、自分も聞いているだけではなく何かアクションを起こしてみたいと思うようになった。私は社会福祉学科に所属しているので、どうしても日々収集する情報や問題意識が日本の福祉に固執してしまっていたのだが、様々なトピックの授業を受ける中で情報の幅を広げることができた。また、グループワークを通して他の学生さんの様々な視点の意見聞くことができて新鮮な体験だった。また、途中から興味のある SDGs のゴールごとチーム分けが行われたが、毎回同じメンバーだと仲良くなれたため嬉しかった。はじめは色々な人と関わるグループ構成で、途中からテーマごとグループを分けるというのはいい仕組みだと思った。他学部他学科の方と同じ授業を受ける機会はなかなか無いので、毎回楽しく受講させていただいた。

2. 心に残った授業回

私が特に印象に残った講義は 2 つある。1 つ目は、第 3 回授業の七尾新聞前口さんのお話である。講義を受け、能登であの日何が起きていたのか、新聞社の方ですら把握しきれないほどの被害状況だったことが分かった。私が初めてボランティアに行ったのは地震から半年以上たった夏だったので、被災直後のお話を現地の方から伺えたのは貴重な機会だった。講義の中で、災害時のトイレの話が一番印象に残っている。災害時の物資支援において、水や食料だけでなく災害用トイレの重要性も改めて気付くことができた。まだまだ復興は続いていくと思うけれど、能登がこの先もずっと住み続けられるまちとなるためにできることをしていきたいと思ったし、身の回りの防災の面でも能登から学べることは学ばせていただきたいと思った。印象に残った講義の 2 つ目は、第 8 回授業の勝又さんの講義である。SDG s のことは大まかに理解しているつもりでいたが、LGBTQ＋に関して触れられていないことに、講義を受けて初めて学んだ。また、気付かないうちに「性別二元論」の社会で生きていたことに気付いた。最後に勝又さんから「今日聞いたこと、これで終わりにしないでね」と声を掛けていただいたことが印象に残っている。あれからジェンダーや LGBTQ＋に関する具体的なアクションを起こすことはできていないが、見えていないだけで身近に悩んでいる当事者の方がいるかもしれないし、これからも考え続けなければならないと思った。今日で終わりにしないでねという勝又さんの言葉をいつか次につなげていきたい。

3. 身についたこと

SDGs を知っただけでは意味がなく、その問題を知った以上は責任を持ってアクションを起こしていかなければならないと考えるようになった。多分野に意識を向けることは難しいが、誰一人取り残さない社会を目指していく上では様々な分野に関心を持ち、それを周りの人にも発信していく姿勢がとても大切だと思った。小さな一歩かもしれないが、何もしないよりはずっと良いと思うので、気になった社会問題を調べたり、様々な社会活動系の講演を聴いたり、これからも少しずつ実践を重ねていきたい。また、小さな事ではあるが、毎回のグループワークを通して自分の意見を簡潔に分かりやすく伝える練習ができたと思う。そして、講義中に授業内容に対する質問を考えながら聞くと、より理解を深められると感じた。また、ひとつ反省点としては、可能であったなら、もう少しチームの方々とコミュニケーションを取り、SDGs 実践のアイデア出しや、自分たちにできるような具体的な提案等ができればよかったと感じた。

4. これからどう活かすか

15 回の授業を受講した中で自分が実践できそうなことを 3 つ考えた。1 つ目は、節電とゴミの削減である。実践講座の中では環境系の話題が多い印象だったが、地球温暖化は待ってはくれない。家での電気やエアコンの使用は最低限に、また、使っていない大学の教室を見かけたりした時は自分から積極的に消しに行くなど、もったいないという意識を常に持って生活していきたいと思った。また、マイバッグやマイ箸などを持ち歩き、使い捨てごみを減らす工夫をこれからも続けていきたい。2 つ目は、マイボトルの持参である。私は都内在住であるが、東京の水道水に対してあまりいいイメージは持っていなかったものの、あまり気にすることなく飲んでいた。第 9 回授業で日本の水道水は非常に安全であること、ペットボトル飲料をマイボトルに置き換えるだけで二酸化炭素の排出を大幅に削減できることを学んだので、これからも意識していきたいと思った。

最後は、自分が活動している地域のボランティア活動を続けていくことである。昨年度、運営を手伝わせていただいた北区の盆踊りや、毎週の体操会での継続的な関わりを通して、大学生が地域に溶け込み信頼を得ていくことの大切さや、縁が繋がっていく面白さを実感した。世代の異なる大学生と地域の方が同じ場所で共生していくために、関わりの場を持ってお互いを知ることは、持続可能なコミュニティを形成する上でとても意味のあることだと思う。お互いの顔が見える地域は安心して暮らし続けられる街だと思うのでこれからもつながりを増やしていきたいし、自分がつながった縁は後輩たちにも引き継いでいきたい。

SDGs 実践講座最終レポート㉑

1. 全体の概要

この授業では、SDGs の 17 のゴールをテーマに、毎週異なる分野の先生が講義を行う形式で進められた。その中で環境やジェンダー、貧困など、さまざまな視点から SDGs を学ぶことで、「持続可能な社会」という言葉が、とても幅広く、複雑な意味をもっていることを改めて感じた。私は人間環境デザイン学科の学生なので、建築や空間、身の回りのデザインを中心に学んでいる。設計課題を進める中で、形や機能などの目に見えるものに、つい意識が向きがちであるが、デザインにおいて人の立場で考えることはとても大切な部分となる。この授業では、人の心や生き方、社会の中での立場といった、数値や図面では表せない部分が多く扱われた。そうした話を聞く中で、SDGs は世界のどこか遠くの問題ではなく、一人一人の暮らしや生き方と深くつながっている目標なのだと感じるようになった。また、どのゴールも 1 人で取り組むことはできても一人の力では達成できないものであり、多くの人が関わり合うことで少しずつ前に進んでいくものだという点も印象に残った。この授業を受ける前は、SDGs は国や企業が取り組む大きな目標というイメージが強く、自分の学びとのつながりをあまり実感できていなかった。しかし、人の尊厳や多様性、誰も排除されない社会を目指すという考え方は、建築やデザインのベースにもなると感じた。どんな空間をつくるか、誰を想定して設計するかによって、ある人にとっては居心地の良い場所が、別の人にとっては入りづらい場所になってしまうこともある。SDGs の知識を持つことで、空間やプロジェクトが社会に与える影響についても、より考えられるようになったと感じる。

2. 心に残った授業回

そして数ある講義の中で特に心に残ったのは LGBTQ＋についての回である。この授業では、性の多様性だけでなく、「〇〇らしくしなさい」と周りから言われ続けることが、人の心にどれほど大きな影響を与えるのかが強く伝えられていたと思う。「女の子なんだから女の子らしく」「男なんだからこうあるべき」といった言葉は、ひと昔前までは当たり前のように使われていた。そしてこのような分類する言葉は最近でもよく用いられている。しかし、それが繰り返されることで、「普通ではない自分は間違っているのではないか」「このままでは認めてもらえないのではないか」と感じるようになり、少しずつ自己肯定感が下がっていくという話はとても印象的だった。中でも特に心に残ったのは、何度も死にたいと思った経験や、リストカットをしてしまったという話である。「自分を傷つけることで、普通では

ない自分の罪を償える気がした」という言葉は、当時どれほど追い詰められていたのかを強く伝えているように感じた。自分らしくいるだけでそこまで苦しまなければならない世界は、とてもつらいものだと思った。「〇〇らしさ」なんて言葉の意味は人それぞれ異なり、その感じ方や考え方も一人一人異なる。それにもかかわらず、多数派と違うという理由だけで苦しむ人がいる現実は、SDGs が掲げる「誰一人取り残さない」という目標とも合わないと感じた。

3. 身についたこと

この授業を通して、「普通」から外れてしまったと感じることで、人はどれほど自分自身を責めてしまうのかを考えるようになった。私は不登校の中学生の妹がいて、妹が「みんなと同じように学校に行けない自分」を責めて、ご飯が食べられなくなったり、自分を傷つけようとする行動が見られることがある。これまでは身近な家族の問題として捉えていたが、LGBTQ＋の授業を聞いて、その気持ちは「普通ではないこと」に苦しむ多くの人たちに共通する感情なのだと気づいた。

妹は今も、調子の良い日と悪い日を繰り返しながら葛藤して生きている。しかしその揺れは弱さではなく、その人なりに生きようとしている過程なのだと受け止められるようになったことは、自分にとって大きな学びである。

4. これからどう活かすか

これからは、妹の味方であり続けたいという気持ちと同時に、「普通」から外れてしまったと感じる人たちを支えたいという思いを大切にしていきたい。ただ安心できるだけの場所ではなく、小さくても「自分の手で何かを達成した」「自分でチャンスをつかんだ」と感じられる経験ができる場をつくることが「自分を普通と思えない人」だと感じる人たちにとって大切だと感じている。そうした体験を通して、自己肯定感を少しずつ取り戻せるようになるのではないかと思う。

私は建築や空間デザインを学んでいるので、将来は建物やプロジェクトを通して、そうした「小さな成功」や「前に進むきっかけ」を生み出せる場所づくりに関わっていきたい。この授業で学んだ SDGs の考え方は、誰もが自分らしく生きられる社会を目指すという点で、私の目指したい方向と今後さらにつながっていくと感じている。

SDGs 実践講座最終レポート㉒

1. 全体の概要

本実践講座では、さまざまな分野で活動する先生方や講師の方の話を聞き、SDGs に関する様々な取り組みや考え、研究について学んだ。また、他の学生との意見交換を通して、同じ課題や目標への取り組みや考えに対しても自分の行動にどう結びつけるかという点について話し合うこともあった。所属している学部学科や個人によって着目点やアプローチの仕方が大きく異なり、とてもおもしろいと感じると同時に、自分の視野を広げるきっかけになったと思う。

全 15 回のこの講座を受けて一番に出てくる感想は、「SDGs は 17 個の目標がすべて必要なのだ」ということである。私はもともと環境問題に関心があり、SDGs ウェディングケーキでいう生物圏（目標 6：安全な水とトイレを世界中に、13：気候変動に具体的な対策を、14：海の豊かさを守ろう、15：陸の豊かさも守ろう）を重視して考えてきた。生活環境が整っていなければ、社会や経済が成り立たないのは当然であり、まずは生きていくための基盤を持続可能にしていくことが最優先だと感じていたからである。しかし、第 8 回で受けた外部講師の勝又さんによるジェンダーに関する講義を通して、人間も社会を構成する存在であり、その人権や平等が守られなければ、持続可能な社会は実現しないのではないかと考えられるようになったことで、生物圏以外の目標に対する興味と必要性を感じるようになった。生物圏という 4 つの目標の中で強くかかわりあっているというのはもちろん基本の考え方ではあるが、環境、社会、経済というそれぞれの環境が関わり合っているからこそ、SDGs は 17 の目標すべてが必要なのだと感じた。

2. 心に残った授業回

心に残った授業回は、第 8 回に行われた外部講師の勝又さんによるジェンダーに関する講義である。この講義は、①の項目でも述べた通り、これまで自分の関心の中心ではなかった SDGs の目標について、初めて強く興味を持つきっかけとなった。特に印象に残っているのは、「性別はグラデーションである」という言葉である。講義を受ける前の私は、心・体・表現・恋愛対象といった性の要素はそれぞれが男女のどちらかに分類され、その組み合わせが一致せずに生きにくさを感じている人のことを「LGBTQ＋の人」として捉えていた。しかし、勝又さんの話の中で、好きなものにも「とても好き」「まあまあ好き」など段階があるように、性別もはっきりとした境界線で区切れるものではないと知り、その考え方に強く納得した。

私自身、心と体は女性で恋愛対象は男性であるという自認がある一方、小中学生の頃には自分自身が「女の子らしく」行動することに対して嫌悪感を抱く時期があった。この講義を通して、それは性の 4 要素のうち「表現」が他の要素の心・体・

恋愛対象などの要素とのグラデーション度合いが一致していなかっただけなのかもしれないと考えるようになった。また、性の 4 要素を無意識のうちに二択で捉えていたことにも気づき、性別二元論が自分の中に潜在的に根付いていたことを自覚することができた。

3. 身についたこと

本実践講座を通して身についたと感じているのは、自分では偏見を持っていないと思っていても、無意識の前提や思い込みを持っている可能性があるという考え方である。これまでの経験の中で、偏見や差別を持たないよう意識してきたつもりであり、特に SDGs アンバサダーとして活動するようになってからは、その点により一層気を付けてきた。しかし、第 8 回のジェンダーに関する講義を通して、性別を二つに分けて捉える考え方が、自分の中にも自然な前提として存在していたことに気づいた。どれだけ意識していても、育ってきた環境やこれまでの経験の中で形成された考え方は、簡単にはなくならないのだと感じた。

人は、これまでに触れてきた価値観や環境の影響を受けながら考え方を形作っており、それに疑問を持つ機会がなければ、その枠組みに気づくことは難しい。今回の講義のように、外からの問いかけや新しい視点に触れることで初めて、自分の考えを客観的に見直すことができるのだと感じた。この経験から、自分の考えが常に正しいと決めつけるのではなく、「なぜそう思っているのか」を立ち止まって考える姿勢を身につけることができたと思う。

4. これからどう活かすか

本実践講座を通して学んだことは、今後の SDGs アンバサダーとしての活動に活かしていきたい。中でも、自分の中にある無意識の前提や思い込みに気づくことの難しさを実感した経験は、他の人と関わる場面で特に重要だと思う。SDGs に関する活動では、課題によっては正解や正義が一つに定まらない場合も多いため、自分の考えを一方的に伝えるのではなく、仲間や相手の意見をよく聞いたうえで、企画の立案や活動への参加を行っていきたい。　さらに、これまで主に環境問題に関心を持ってきたが、本講座を通して社会的側面の課題にも興味を持つようになった。今後は、SDGs アンバサダーの活動の中でも、これまで参加したことのなかったダイバーシティチームが企画するような取り組みにも参加しようと思う。

また、実践講座でもあったようにグループワークの場面など意見交換の場では、自分と異なる考えに対して、その背景にある価値観や経験を想像しながら耳を傾ける姿勢を大切にしたい。環境問題やジェンダーなど、SDGs が扱う課題には多様な立場や考え方が存在しているからこそ、自分の考えと他の人の意見どちらも無視することなく、すべての意見を掬い取る気持ちで学び、今後の活動をしていきたい。

SDGs 実践講座最終レポート㉓

1. 全体の概要

14 回を通して様々な人にお話ししていただいて、今世界・日本で起こっている問題について新しく知ったり深く理解したりすることができた。講義の中には、ヨルダンの戦争、海外の水事情など私たちとは遠い国だが知っているべき話題や、ジェンダーの問題、能登半島の問題など、私の生活とも関わりが深い話題もあった。良い話し合いについての話や同じ文でも読んだ人によって受け取り方が違うというお話は、大学生活に直結するもので、学んだことを生かしやすかった。

これらを通して、社会の課題は独立したものではなく、様々な要因が絡み合っていることが見えてきた。だからこそ、簡単な解決策はなく、各地で様々な議論がなされていると分かった。14 回の講義は、こうした複雑な社会課題に対して一つの正解を学ぶものではなく、異なる立場や価値観を知り、自分自身で考え続ける姿勢が重視されていたと感じる。SDGs を遠い目標として捉えるのではなく、日常生活や身近な選択とも結びついた課題として考えることの重要性をこの講義を通して学んだ。また、学んだ上でどう行動に移していくかを問い続けられる講義であった。私たちに何ができるか、見つけることが難しい講義もあったが、得るものはたくさんあった。

2. 心に残った授業回

私がこの講義を取ろうと思った理由は、主に環境問題に興味がるからであった。しかし、8 回目で勝又さんのお話を聞いて元々LGBTQ などは知っていたが、自分から深く知ろうとはしていなかったと気づき、自分の今までの行動とこれからを考えるきっかけとなった。印象に残った話が性別二元論という話である。私たちは女と男に分け、色にまで性別を付加していると聞いて初めて自分が無意識にしていたことを認識した。一方でこの男女という区別はよく考えてみるとしっかりとした基準の元行っているわけではないことも自覚できた。これらを踏まえて自分の今までの行動を振り返ると無自覚に誰かを傷つけていたのではないかと不安になった。勝又さんの「誰にも相談できなかった」「自分を罪人だと思っていた」という言葉が強く刺さり、勝又さんを追い込んだのは周りの無自覚な言葉たちだったのだと感じたからだ。この講義で、多くの人の考えや価値観を知り、多様な立場に立って考えることの重要性を学んだ。どんな社会であるべきなのか正解はないが、課題を知ることができた今、知っているけど何もしない大多数になるのではなく、まずは普段の生活から意識を変えて行動に移していきたいと感じた。講義後、決めつけない姿勢を持ち、根底に潜む性別二元論を壊すことを意識するようになった。さらに周りを巻き込んで行ければ、目標 5 番のジェンダー平等の実現に繋がっていくはずだ。

3.　身についたこと

講義を通して私が身につけたことは、様々な視点から物事をみる力だと考える。例えば、9 回目の講義で世界の水事情について聞いた際、水道の整備についての話題があった。きれいな水を手に入れることができない地域は募金などで助けることで、早く水道を作り、解決できると思っていた。しかし、そういった地域では、水を売ることを生業にしている人もいるため、このような人たちの支援も考えてからではないと、結局誰かを取り残してしまい SDGs 達成にはつながらないと知った。

加えて、このような水道の問題は、さらなる貧困や環境汚染につながる可能性がある。水道ができても水道料金を払えるのは生活に余裕がある人のみであり、貧困の問題と深く関係がある。また、作っても維持できない、汚水処理が追いつかないと環境を汚染することになってしまう。このように問題を関連付けて考える力も講義を通して身についたと感じる。以前なら、１つの社会問題にいくつもの SDGs 達成への課題が絡んでいるという考えはなかった。しかし今は、物事を多様な視点から捉え、それら同士のつながり・影響を考える力を得ることができ、これは今後社会課題に向き合っていく上で重要な基盤になると考える。

4.　これからどう活かすか

私が今最も興味のある目標は 3 番の「すべての人に健康と福祉を」であり、今学んでいる食の知識を生かして、この目標達成に貢献したいと考えている。具体的には、食品会社で栄養に富んでいて、おいしい、機能性食品を開発し、日本の忙しい方々や海外の栄養不足の方々に届け、世界中の人々が健康になれるお手伝いがしたい。この夢にも様々な人の視点に立って影響を考える力が重要と考える。例えば、機能性食品を開発する際には、健康への効果だけでなく、価格や原材料の調達方法、環境への影響など、さまざまな側面を考える必要がある。栄養価が高くても価格が高ければ、支援を必要とする人に届かず、健康格差を広げてしまう可能性がある。また、原材料を大量に使用することで環境に負荷をかけてしまい、逆に、さらに未来の人々の食糧不足につながる可能性もある。社会課題の解決策に簡単な正解がないことを知っていることが私の強みであり、どうするのが最善かを考え続けることができる。この講義を通して身につけた、物事を多角的に捉え、課題同士のつながりを考える力を生かし、食を通じて一人でも多くの人の健康な生活に貢献できるよう、大学でこれからも様々なことを吸収していきたい。

SDGs 実践講座最終レポート㉔

1. 全体の概要

本講義「SDGs 実践講座」は、SDGs（持続可能な開発目標）の理念や背景を理解し、それらが現代社会のさまざまな課題とどのように結びついているのかを学ぶことを目的とした講義であった。講義では、貧困や環境問題、ジェンダー、移民、教育、国際協力、キャリア形成など、幅広いテーマが扱われ、それぞれの分野における専門家や実務経験者による講演を通して、SDGs が抽象的な目標ではなく、現実の社会問題と密接に関係していることが示された。特に、国内外の具体的な事例を交えた説明により、SDGs が遠い国の話ではなく、日本社会や私たちの身近な生活とも深く関わっていることを理解することができた。また、本講義では多様な価値観や立場に触れる機会が多く、社会課題を一つの視点だけで捉えるのではなく、複数の視点から考える重要性を学んだ。SDGs を通して社会を見ることで、自分自身の将来や社会との関わり方について考えるきっかけとなり、知識の習得にとどまらず、問題意識を持つ姿勢の大切さを学ぶ講義であった。

2. 心に残った授業回

本講義の中で私が最も心に残った授業回は、第 3 回「能登半島記―被災記者が記録した 300 日の肉声と景色―」である。本講義を通じて、能登半島地震による被害の深刻さと、その後の復旧がいかに困難であるかを改めて痛感した。特に印象に残ったのは、被災地の具体的な光景として語られた、危険と書かれた張り紙が色褪せたまま残されている建物や、ブルーシートが長期間にわたり風雨にさらされ、破損した状態で放置されている様子、更地となり人の営みが失われた街並みである。これらの描写から、災害から時間が経過してもなお、復旧が十分に進んでいない現実が強く伝わってきた。また、実際には 600 人以上の方が亡くなっていたにもかかわらず、発災当初は被害の全容を把握することすら困難であったこと、水道や電気といった生活に不可欠なライフラインが 1 か月以上経過しても十分に復旧していなかったことから、被災地が置かれていた厳しい状況を実感した。その中でも特に心に残ったのは、トイレの問題である。日本社会では語られにくいテーマであるが、トイレが使えない状況が続くことで人々が水分摂取を控え、結果として体調を崩してしまうことがあると知り、衛生環境の重要性を強く認識した。この点から、SDGs のゴール 6「安全な水とトイレを世界中に」は、平常時だけでなく災害時においても極めて重要な目標であると感じた。さらに、他の受講生から、トイレの課題をオープンに議論する場を設ける提案や、排泄物を肥料として循環させるといった前向きな取り組みのアイデアを聞き、学びが一層深まった。災害を学ぶことは悲惨な側面に目を向けるだけでなく、新たな工夫や希望を生み出す契機にもなり得ると理解できた。

3.　身についたこと

本講義を通して身についたと感じているのは、物事を単純に理解しようとしない姿勢である。これまでの自分は、社会問題に向き合う際、分かりやすい答えや明確な解決策を求めてしまう傾向があった。しかし、実際の社会はそのように単純ではなく、一つの問題の背後には複数の要因や立場の違いが重なり合って存在していることを学んだ。どの視点から見るかによって問題の見え方は大きく変わり、ある側面だけを切り取って判断することには危うさが伴った。また、自分自身の考えや価値観についても、絶対的なものではないと意識するようになった。これまで当たり前だと思っていた考え方も、自分が置かれてきた環境や経験の影響を強く受けて形成されたものであり、他者にとっては必ずしも共有されていない場合がある。講義を通して多様な意見に触れる中で、自分の理解が十分でなかった点や、無意識のうちに前提としていた考えに気づかされる場面が多くあった。さらに、問題を考える際には、結論を急ぐことよりも問いを持ち続ける姿勢が重要であると感じるようになった。すぐに答えを出そうとするのではなく、分からない部分や曖昧さを抱えたまま考え続けることが、結果として理解を深めることにつながる。そのように立ち止まりながら思考を重ねていく姿勢こそが、社会と向き合ううえで必要な力なのだと考えるようになった。

4.　これからどう活かすか

本講義や SDGs に関わる課外活動を通して得た視点は、今後の学生生活や社会との関わり方の中で、長期的に活かしていきたいと考えている。課外活動では、実際に行動してみることで、思い通りに進まないことや、自分一人では判断できない場面に何度も直面した。その経験から、社会課題に向き合う際には、即座に正解を出そうとするよりも、状況を見極めながら考え続ける姿勢が重要だと感じている。今後は、日常生活の中で SDGs に関連する話題や社会的な問題に触れたとき、表面的な情報だけで判断せず、その背景や別の立場の存在を意識するようにしたい。特に、自分とは異なる価値観や意見に出会った際には、結論を急がず、なぜそのような考えに至ったのかを考える時間を持つことを心がけたいと思う。課外活動での経験を通して、一人の視点だけでは見えないことが多いと実感したからである。

また、将来の進路やキャリアを考える場面においても、SDGs の視点を意識していきたい。大きな行動を起こすことが難しい場合でも、情報の受け取り方や人との関わり方を少し変えることはできる。完璧な貢献を目指すのではなく、小さな選択の積み重ねを大切にしながら、本講義や課外活動で得た考え方を、これからの行動に落とし込んでいきたいと考えている。

SDGs 実践講座最終レポート㉕

1.全体の概要

本講義は、現代社会が抱える複雑な課題に対し、特定の分野にとどまらず、多角的な視点からアプローチすることを目的としている。講義形式はオムニバス形式で、本学の多様な学部に所属する教員に加え、新聞記者や NGO 職員といった現場の実務家が登壇した点が大きな特徴であった。 授業では、今年 1 月に発生した能登半島地震の被災地報道をはじめ、ヨルダンにおける難民支援の実態、世界的な水資源の問題など、SDGs に関連した幅広いテーマが扱われた。これらを通じて、一見バラバラに見える社会課題が、実は貧困や歴史、環境といった要因で複雑に繋がっていることを学ぶことができた。 また、本講義の最大の特徴は、一方的に話を聞くだけでなく、毎回グループワークを行い、意見交換をした点にある。私はオンラインでの参加であったため、通信環境の問題や、議論の途中で時間が来てしまうといったもどかしさを感じる場面も多かった。しかし、そのようなもどかしさの中で、他者といかに意思疎通を図るかというプロセス自体が、コミュニケーションの実践的な訓練となった。最終的には、これらの学びを統合し、「ビジュアル・ナッジ」をテーマとした最終発表を行うことができた。

2.心に残った授業回

全 15 回の講義の中で、第 3 回「能登半島地震」の回が最も記憶に残っている。その最大の理由は、私が抱いていた災害支援に対するイメージと、被災地の過酷な現実との間に大きな乖離があり、衝撃を受けたからである。 講義を聞く前、私は被災地支援といえば、食料や水の配布が最優先事項だと漠然と考えていた。しかし、現地取材を重ねた前口氏から発せられた「被災地ではおにぎりよりもトイレが重要」という言葉は、私の固定観念を覆すものであった。トイレ環境が不衛生であるため、被災者が排泄を我慢しようとして意識的に水分摂取を控え、その結果として体調を崩し「災害関連死」に至るというメカニズムは、あまりにも残酷な現実であった。 また、熊本地震では 3 週間で完了した水道復旧が、能登では 1 ヶ月経過しても 6 割にとどまるというデータの対比も印象的だった。半島特有の山がちな地形と道路網の寸断が、これほどまでに支援を阻む要因になることを突きつけられ、東京でニュースを見ているだけでは決して分からない現場の困難さを肌で感じた。トイレという人間の尊厳に関わる「見えない苦しみ」にこそ目を向ける想像力を持つことが、真の支援の第一歩なのだと痛感した。

3.身についたこと

本講義を通じて身についた最大の収穫は、自分の専門領域の枠を超えた「多角的な視座」と、「実践的な対話力」である。毎回のグループワークでは、国際学部や社会学部といった、自分とは異なる学問的背景を持つ学生たちと議論する機会に恵まれた。私は普段、情報学や環境を専攻しているため、社会課題に対してどうしてもデータ分析やシステム構築といった技術的な解決策を優先して考えがちであった。しかし、グループのメンバーからは人間中心の視点からの意見が多く出された。この対比を通じて、技術だけでは解決できない問題の深さに気づき、物事を多面的に捉える姿勢が養われたことは大きな財産である。また、オンライン参加ならではの経験も学びへと昇華できた。議論が白熱している最中にブレイクアウトルームが強制終了してしまうなど、物理的な制約に直面することも多かった。だが、限られた時間内でいかに自分の意見を端的に伝え、相手の意図を汲み取るかというコミュニケーションの質を強く意識するようになった。 さらに、最終発表で取り組んだ「ビジュアル・ナッジ」の提案を通じ、学んだ理論を具体的な解決策として形にするプロセスそのものを楽しむ姿勢も身についたと実感している。

4.これからどう活かすか

本講義での学び、特に最終発表で取り組んだ「ビジュアル・ナッジ」の概念は、今後の私の研究活動において強力な武器になると確信している。 現在、私はゼミで環境や循環型キャンパスに関する研究を行っているが、これまではシステムの効率化といった技術面にばかり目が向いていた。しかし講義を通じて、どんなに優れたシステムを作っても、それを使う人の心が動かなければ行動は変わらないと気づいた。今後は、自身の研究に「ナッジ」の視点を取り入れ、利用者が無意識に環境に優しい行動をとれるようなデザインや仕組み作りを模索していきたい。 また、講義で触れられた「教育を受けた者の責任」という言葉を大切にしたい。世界には学校に通えない人が数億人もいる中で、大学で学べること自体が特権である。だからこそ、私は自分の専門であるデータ分析などのスキルを活かして、ヨルダンの難民問題や被災地の現状といった「見えにくい課題」を可視化し、社会に伝える役割を果たしたいと思う。 「一人の一歩は限られているが、その一歩を踏み出すことが重要だ」という教えを胸に、今後は机上の研究にとどまらず、現場の文脈を理解した上で社会に貢献できる人材を目指して努力を続けていくつもりである。